566-39-(6)
1200501514821
566
39

566
39

1258

蘇峰叢書
第六册

人物偶錄

蘇峰德富猪一郎著

東京民友社發行

49

人物偶錄は、名詮自證、全くの偶錄だ。其の書中に歷擧せられたる人物中には、種々樣々の人がある。必らずしも偉人英漢の肖像畫陳列場ではない。否な寧ろ手當り次第に編次したるものの。而して本書の眞面目は、却て此に存する。

* * *

本文中に著者と血緣の者若干を揭げたることは、餘りに著者の身邊に偏私するを咎むる讀者もあらう。されど著者は唯だ一介の操觚者のみ。著者が親愛する人の爲めに、せめてもの手向けは、唯だ紙碑あるのみ。寬大なる君子は、必らず著者の微

衷を諒とせらるゝであらう。

＊　＊　＊　＊　＊

但だ如何に紙碑を建立したればとて、著者は決して事實と牴觸するが如きことなきを期してゐる。若し萬一さる感を讀者諸君に與ふるが如きあらば、是れ著書不敏の致す所、著者は唯だ自から信じたる所を、率直に陳述したるに過ぎない。

＊　＊　＊　＊　＊

韓退之は、其姪十二郎を祭るの文を、蘇東坡は其の亡妻王氏の墓誌銘を、何れも其の文集に揭げてゐる。古人の所謂る『我輩情鍾不自由。等閑白却九分頭。此懷豈獨騷人事。三百篇中半是

566-39

愁。』の句は、今も猶古の如しである。

昭和三年十月十二日

大森山王艸堂に於て

蘇峰迂人

蘇峰叢書第六册

人物偶錄

目次

大隈侯……一
大隈侯を葬送す……二二
海東老公……二六
海東老公を葬る……四一
桂公長逝後滿十三年……四三
山公遺烈を讀む　山縣老公の側面觀……四五
杉浦重剛翁……五二
伊集院彥吉君を弔す……五四
快男兒横田千之助……五六
實業家の氣品　和田豐治氏を弔す……五八

德川賴倫侯を弔ふ……六〇
京都同志社の一先生……六二
救世軍と山室君……六六
（山室君の英國行を送る演說筆記）
大谷伯爵夫人を弔す……八一
古の日本婦人の典型……八五
屑屋の籠……八九
其一　矢島楫、鹿山の兩和尙、其二　金雲聳、李一堂、明石柏蔭、其三　海舟翁、桂公、寺內伯、其四　重野、竹添兩翁、及び其他、其五　紅葉、美妙、鷗外、其六　巍谷先生、萩の舍主人、其七　島田沼南、中江兆民、其八　原田直次郎君、其九　安場翁と家翁、其十　江藤新作君、其十一　古澤介堂、其十二　長岡雲海子爵、其十三　石井十次君
故洪水先生夫人……一二四
吾母の大祥忌……一六〇
京都帝國大學構內の樟樹……一六四
矢島楫子……一六七
矢島先生……一八〇
國民新聞地方部長兼調査部長
德富萬熊君の靈に誄ぐ……二〇一
陳言一則……二一九
德富萬熊永眠後一個月
附　湯淺作次郎君が悼む

蘇峰叢書
第六册

人物偶錄

大隈侯

大正十一年一月十日、大隈侯逝く。行年八十有五歳、嗚呼悲夫。

＊　＊　＊　＊

我が日本帝國は、大隈侯の死によりて、世界に於ける其の代表者を喪うた。我が日本國民は、大隈侯の死によりて、一國に於ける其の先達者を亡うた。我が日本の青年は、大隈侯の死によりて、其の指導者を失うた。而して全地球と云はざるも、太平洋の西、印度洋の東に於ける地域に於て、一の名物男を少くした事は、確かに世界の損失と云はねばならぬ。

本來一百二十五歳を以て、人間の定命とする說を高唱したる、大隈侯當人よりすれば、八十五歳は、名殘り多きが。然も尋常人の壽命よりすれば、大隈侯は福壽兩ながら圓滿に庶幾しと云はねばならぬ。一度死せねばならぬが、人間の運とすれば、大隈侯は其の臨終に際しても、亦た幸福の人と云はねばならぬ。何となれば其の一生の過半は、殆んど戰鬪にて始終した大隈侯も、卽今、上は九重より特別の恩寵を忝うし、下は市井の民衆に仰景せられ。從來其の政敵にてあり、劇しく鎬を削りたる者にさへも、祝福せられつゝある一時に於て、最後の息を引き取つたからだ。最も多く敵を作りたる大隈侯が、天下無敵の境界に在りて、往生を遂ぐるとは、抑も如何なる仕合せであらう。

本文の記者も、亦夙に大隈侯其人に、親炙したる一人である。平心に考ふれば、彼に大英雄とか、大豪傑とか云ふ尊號を上るは、何となく穩當を缺く感じがする。併し彼を何と云うたならば、適當であらう乎と問へば、一寸その答に窮する。兎に角大隈侯は、毛色の變りたる一個の怪物であつた。一切の風袋を去り、一切の乘除を爲しても、尙ほ彼は尋常碌々の徒でなかつた。

彼は慶應、明治、大正の三代にかけて、日本の歷史に、若干の印象を殘したる名物男に相違ない。恐らくは名物男と云ふが、最も吾人の彼に對する感情を、適當に言ひ現はしたものであらう。率直に云へば、吾人は彼を餘りに尊敬もせぬ。餘りに愛慕もせぬ。今少し露骨に云へば、餘りに心服もせぬ。併し彼が尋常人の及ぶ可からざる資格を、最も多量に、豐富に具備したる事は、如何なる彼の政敵でも、之を抹殺する事が能はぬ。此點に於いて、吾人は彼を驚嘆するを禁じ得ない。世或は彼に老偉人と云ふ稱號を愛しむ者あるも、彼に老快人の稱號を愛しみ得可き者はあるまい。然も快と偉と、相距る幾許ぞ。

彼の變化多くして、年と與に彌よ振うたる長き公的生涯に就て、語らんとせば、吾人は一部の日本現代史を叙するの危險に陷る。されば極めて手短かに述べん

に、彼は攻城野戰の武勳以外、慶應の末期より、明治、大正の現時に至る迄、あらゆる國家の進運に貢献せないものはない。彼の干係したる一部の事を以てしても、尙ほ傳ふ可きものがある。況んや彼は之を兼該したるに於てをや。

彼は政治の方面に於ては、伊藤、山縣と抗衡した。財政、經濟の方面に於ては、井上、松方と抗衡した。外交に於ては、陸奥と抗衡した。政黨者としては、板垣と抗衡した。教育文化の方面に於ては、福澤と抗衡した。彼の功勳は、各部に於て、必らずしも對手の上に出でたとは云はれまい。伊藤の憲法制定、山縣の地方自治、松方の紙幣銷却、金貨本位、陸奥の條約改正、福澤の西洋事情等の如き、其の各部に於ける成績を以て比較すれば、彼の强情なるも、恐らくは自から之に及ばぬと白狀するであらう。

然も彼等は概して專門家だ。彼は之に反して何んでも屋だ。彼は各人の各部に於ける各成績を、一人にて悉くそれ程に擧げ得ざりしとするも。各人の各部に於ける、各成績の總てを合したる、或る物を有し。而して其の以外に、尙ほ彼等の成し得ざる、或る物を、成し得たるものがあつた。彼は明治、大正の時代に於ける、一種の總合商店であつた。云はゞ彼は政治、外交、經濟、教育、宗教、科學、あらゆる方面に於ける、『三越』であつた。過去此の如く、現在最も此の如くであつた。彼は宛もバンヤン樹の如く、一本の木から、一個の森を做した。幹から枝を出し、枝から根が垂れ、此の如くして、遂に重々密々たる森が出來た。所謂る千手萬指の喇嘛佛は、彼を徵象したものではあるまい乎。

彼の頭腦は百科全書的であつた、彼の事功も百科全書的であつた。彼の長所も此處にあり、彼の短所も此處にある。然も何れかと云へば、短所よりも長所が多かつた。他の競爭者は、何れも銘々得意の武器を携へた。然も彼には辨慶の七つ道具があつた。相手次第何でも持つて來いと云ふが、彼の意氣込であつた。而して隨處に、拔群の才能を現呈せしめた。

彼の公人として頭角を露はしたのは、戊辰の際、長崎に於ける、耶蘇教徒の處分事件であつた。彼は他の政治家、特に伊藤、井上の徒に比し、寧ろ外人を畏憚しなかつた。彼は當時虎鬚を捋づるの感を爲さしめたる、英國公使パークスとさへも、其の議論を上下した。維新政府の東京に建立せらるゝや、彼は伊藤、井上等と所謂る築地梁山泊の三人男として、鋭意革新の業に從うた。而して其の傍若無人の言動は、彈正臺の彈劾を受くるに至つた。彼は岩倉、木戸、大久保、伊藤等の米歐巡遊の留守居役として、西郷、板垣等の武斷派に對し、少からぬ苦心をした。彼は井上の後を承けて、極めて厄介なる財政の衝に當つた。同時に地租改正の業をも擔當した。明治七年の臺灣役、明治十年の西南役、何れも彼は財政の重責に膺りて、一時のやり繰りをつけた。やり繰り屋としての彼は、天下一品であつた。

彼は其の豪侈なる生活と云はんよりは、寧ろ他人の如く隱匿を好まず、明々地に大名然たる生活を爲したる故を以て、他の嫉視を受け。特に島津久光の如きは、彼を目して、奸物の標本と指斥した。然も彼は之に畏縮せざるのみか、却て逆襲を試み、彼の强頑なる島津をして閉口せしめた。

明治六年十月征韓論の破裂より、明治十一年五月大久保の横死に至る迄、明治政府は、大久保を中心とし、大隈、伊藤を兩翼として進行した。適切に云へば、政府の生命は、專ら此の三人の手にありと云ふ可きであつた。

大久保が如何なる程度に於て、彼を信任したかは、知り難い。大隈と或る意味に於ては、同功一體とも云ふ可き井上を嫌厭して、之を遠ざけ。大隈を其の右手としたのは、何故であつた乎。要するに大久保は、大隈を信任したが爲めに、少からざる犧牲を拂つたに相違ない。それにも拘らず、尙ほ大隈を信任したのは、如何に彼が大久保に取りて、調法の一人であつたかゞ判知る。彼は當時に於て、實に廟堂に缺く可からざる一人であつた。

大久保の横死後は、井上も舞臺に現はれ來つた。明治十一年五月から、同十四年十月、大隈の政府を去る迄は、明治政府の大立者は、大隈と、伊藤とであつた。固より岩倉は維新以來、引き續き其上に居たが。當時の岩倉は、聊か强弩の末で、復た維新同天の大芝居を目論見たる意氣は無かつた。當時民間に於ては、國會開設の議行はれ、天下の風雲頗る急であつた。此に於て大隈、伊藤、井上の三人間には、少くとも現狀維持の行はれ難きを見て、改革の相談が始まつた。福澤も其の參畫者の一人であつた。云はゞ四人同盟が出來たのだ。

然るに大隈と伊藤との間に、葛藤が出來て、遂に大隈の諭示免官となつた。此れは明治政治史中の一大謎題であつて、今尙ほ明々地に之を解釋したるものがない。伊藤、井上側より云へば、大隈が拔掛の功名に迅りて、其の政友を裏切つたと云ひ。大隈側より云へば、伊藤、井上は、薩長の武斷派に威嚇せられ、看す看す政友の首を切つて、敵の軍門に降つたと云ふ。何れの側からも申分はある。併し此れは明治政治史中尤も興味の多き宿題として、吾人は姑く預り置くとする。但し此れからが、變化極りなき、大隈の後半生の幕が開かれた。

人一倍負けず魂の蟠まつた大隈は、一落千丈强。廟堂の高峰より、殆んど半謀反人の肩書を付けられ、谿底迄突き墮された。それにも屈せず、一方には改進黨を組織した。他方には早稻田に學校を設けた。彼が黨魁として、且つは敎育者としての分限は、此時から發展し來つた。

彼は當時に於て、既に民間に若干の勢力を扶植してゐた。その一は經濟方面であつた。一言に云へば日本の海運業と、日本の金融業とは、彼に負ふ所が多大である。三菱の發達史は、彼を除却しては、一頁も書くことが能はぬ。正金銀行の如きも、亦た然りだ。而して勸業、物産、通商、貿易等、所謂る明治政府の保護政策は、其の惡果を來したにせよ、善果を齎したにせよ。殆んど悉く彼の手を經由せぬものは無かつた。

諺に楚材晉用と云ふが、福澤門下の政治思想ある者の八九分通りは、彼の傘下に集つた。更らに小野梓の率ゐたる少壯大學生の一部も、亦た然りだ。而して彼は蚤に新聞なるものに著眼し、その方面に連絡を取つてゐた。されば大隈の政黨製造は、成長でなく製造であつたが、正しく急場の間に合ふ丈の準備は出來てゐた。

政府は、正面の敵である板垣の自由黨よりも、昨日迄は同釜の飯を食つたる大隈の改進黨を、より多く惡んだ。而して政府筋の離間策は甘くも此間に行はれ、自由黨と改進黨との同志打が始まつた。

從來の大隈は、口を『へ』の字形に結んで、何となく鹿爪らしき男であつた。奸物の標本と云はれても、致方なき程不愛相の男であつた。然も彼は能く環境に適應する長技を持つてゐた。此の殿樣は、何時の間にやら、先生ともつかず、親分ともつかず、極めて親み近く可き、一個の民衆的先達と化し來つた。此れは固より一瞬間の早業ではなかつた。可なり長き歲時を要した。然も改進黨を作つて、第一に政黨化した者は、大隈當人だ。早稻田の學校を創立して、第一に教育せられた者は、大隈當人だ。早稻田校友會の筆頭には、誰が何と云うても、其の創立者を置くことを忘れてはならぬ。早稻田氣質の權化は彼だ。彼其人が則ち早稻田氣質だ。

惡緣は契り深しで、喧嘩はしても伊藤、井上とは、切つても切れぬ緣がある。彼は明治廿一年二月に、久しく無沙汰であつた明治政府に入りて、井上の後を承けて、外務大臣となつた。彼には井上の跡掃除の役目を、先天的に引き受くる運があつた。明治六年の財政方面でも、彼は井上の跡を始末した。今度も井上の條約改正失敗の跡始末が、彼の重なる役目であつた。

彼の條約改正は、不幸にして、井上の條約改正以上の物議を挑撥し、それが爲めに、彼は一脚を失うた。彼は不思議に生命に緣のある男だ。彼が再び民間に下つ

た後は、政府は從前に過ぐるも及ばざるなき惡辣手段を以て、彼を迫害した。彼は樞密顧問も剝ぎ取られた。彼は一時兵粮攻に遭うた。

負けぬ氣の佐賀魂は、彼の本領だ。彼は到頭辛抱し拔いた。而して明治二十九年には、松隈內閣が出來した。此の內閣は、多くの點に於て、彼が實際的政治家としての缺點を、擴大的に天下に暴露せしめた。然も新聞、雜誌の發行停止の惡法を廢止したる一事のみにても、彼に感謝す可き事實は儼存してゐる。而して彼は又た伊藤の取持にて、明治三十一年六月には、內閣の主班となり、隈板內閣を組織した。此れが松隈內閣以上の失敗であつたが。それは總ての政黨者流、及び之を妨害したる官僚者流の、平等に分擔す可きもので、必らずしも彼一人の責任に歸す可きものではあるまい。

誰れしも大隈の政治的生命は、此れが最後である可く想はしめた。然るに意外にも、大正三年四月、彼は老友井上の周旋にて、七十有七歳にて、又た內閣を組織し。大正四年十一月の京都に於ける御卽位式、大嘗會等は、彼が在職中に施行せられた。日本が大正三年八月、世界大戰參加も、固より彼の在職中の事だ。彼は大正四年に、重ねて爆裂彈に襲はれたが、又たしも生命に緣ありて、無事なるを得た。

彼は大正五年の十月に其職を辭したが、然も周圍の事情の爲めに、寧ろ餘儀なく辭したのであつて、決して自から好んで辭したのではなかつた。その證據には、苟も國家の大事とあらば、何時でも最後の御奉公をするとは、彼の口癖の樣に言明した言葉であつた。其の言葉通りに信ずるならば、原內閣の後を承けて、今一度內閣を組織するの希望があつたかも知れぬ。若し周邊の事情が、彼に迫つたならば、決して之を辭退しなかつたであらうと思はれた。此の如くして、彼は政治方面に於ても、伊藤よりも、井上よりも、長く久しく存へた。其の功科表を計上した後でなければ、伊藤との對照は取れぬが、政治的壽命の長かつた丈は、彼

が壽命の長かつた如くに、間違ない事實だ。

併し單に政治家として彼を見るは、彼を縮小するものだ。政治は彼の一部分だ、否な一小部分だ。彼の輪郭は社會的に觀察して、始めて能く判る。云はゞ政治も、教育も、經濟も、彼をして社會的に働かしむる手段、方便に過ぎなかつた。彼の早稲田邸は、私設國際倶樂部であつた。世界の旅客は日光を見ずとも、箱根には赴かずとも、奈良や、京都には遊ばずとも。先づ早稲田の老人に丈は面會せずしては、還らなかつた。日本に富士山あるを知る程の外人は、日本に大隈あるを知らぬものはなかつた。此の意味に於て、彼は正しく國民的代表者であつた。國内では早稲田老人の駄法螺として、冷笑せられたる言も。世界は重大事件として、之を受取つた。併し國際的に、此の通りであれば、國民的には、猶更らの事であつた。

凡そ門戸開放と云ふ言葉を、文字通りに活用したものは、日本國中に於て、早稲田邸であつた。何人でも彼に驩迎せられた。曾て彼が貴族的趣味者である如く誤解したる者も、一たび早稲田に赴けば、其の一切平等的待遇に感謝せざるを得なかつた。彼は實に廣大教化主であつた。彼の早稲田邸は、人間の手形交換所であつた。何等の差別がなく、隨意に取引せられた。但だ彼の餘りに寛大なる、時としては不渡手形さへも、颯々と通用せしめた。

彼の知識は、其の奥行に於ては、左程でも無つたが、其の間口は實に廣かつた。餘りに廣くして、何處が入口か判らない程であつた。如何なる問題にも、相當の理解があり、相當の興味を持つてゐた。若し强ひて其の稀薄なる部分を指摘すれば、法律、制度、文藝、美術等の方面であらう。併しそれさへも他と議論を上下するに、毫も差支なかつた。其の强點は、歴史、及び時事問題であつた。而して統計の如きは、其の最も擅場であつた。或人は彼の學問を耳學問と云ふが、目から得た分量は、決して少くなかつた。何れにせよ、彼は無類の記憶力の持主であ

つた。然も其の記憶が、數字に於て、最も鋭敏で、且つ精詳であつた。

演說も專門家ならざる者としては、決してまづくなかつた。座談はそれよりも、長技であつた。然も其の最も長所は、半座談、半演說であつた。則ち十數人、若くは數十人に取り捲かれ、之を相手に、其の無盡藏の記憶から、機智の配劑によりて、春繭の絲を吐くが如く、秋蛛の網を造る如く、巧妙自在に辯じ去り、辯じ來る事だ。

凡そ世の中に、公會の席に於ける伊藤と、大隈の試合程、面白きものはなかつた。川中島に於ける不識菴、機山の立合も、此程ではあるまいと思はれた。彼等は座に第三者の存在するを忘れなかつた。而して一上一下、互ひに揶揄し、互ひに批判し、互ひに其の弱點を衝き、時としては其の樂屋落さへも、さらけ出すを遲疑しなかつた。記者は明治四十二年十月、首相官邸に於ける、桂首相の伊藤の滿洲旅行送宴に列し、大隈の隣席に坐し、兩雄の太刀打を目睹耳聞した。而して最後に伊藤は自から立て、大隈の爲めに乾杯の辭を陳べた。此れが正しく大隈、伊藤の死別であつた。長き友人であり、且つ喧嘩相手であつた伊藤、大隈は、此の如くして互ひに相別れた。

但だ第三者として云へば、卓上の論談に於ては、大隈に六部の强味があつた。然も廟堂の評議に於ては、或は其の比例が顚倒したかも知れぬ。

彼は必らずしも創始、獨闘に於て、其の大なる素質を示さなかつた。然も其の應用力に至りては、八方無礙であつた。彼は共產主義の思想者でなかつたが、思想の共產主義者であつた。彼は意見、議論に於て、決して所有權を認めなかつた。彼の頭腦は、巨大なる海綿であつた。如何なる液體にあれ、之を吸ひ盡さずんば止まなかつた。前回に彼に進言した者が、次回に彼により其言を說法せらるゝが如きは、尋常の茶飯であつた。彼の頭腦は、精錬せられなかつたが、同時に硬化しなかつた。常綠の老少年とは、正しく彼の事であらう。此の一點に於ては、

虞翁と雖も、彼程に新らしき物を平氣で、受け容るゝことは能はなかつた。

彼の外國語の素養は、覺束なかつた。彼は足一たび横濱を出でゝ、海外に遊ばなかつた。然も凡そ古今東西の事、其の形而上と、形而下とを問はず、一として彼の預かり知らざるものは無かつた。單に此れのみにても、彼は現代に於ける、一個の驚異であつた。

彼は言必信、行必果と云ふが如き立前の人ではなかつた。而して一度面倒を見た者は、一生面倒を見ると云ふ程でもなかつた。云はゞ彼の大風呂敷の中には、恆に或物が在つたが、必らずしも同一物では無かつた。若し其の統率力が乏しかつたとすれば、其の包容力は多かつた。若し其の政友を輕々しく手離したとすれば、政敵を手緊しく追窮しなかつた。

彼の一生を始終したのは、彈力であつた。彼の彈力は、鋼鐵板の如く、薩長の藩閥と對抗して、三十餘年、肯て屈撓しなかつた。握手はしたが、叩頭はしなかつた。妥協はしたが、降參はしなかつた。然も彼の如く戰鬪的生涯を始終しても、彼が如く心地の和平、寛厚なるものは、殆んど比類がない。彼の精神にも、彼の性情にも、彼の風采、態度にも、殆んど五十年間、惡戰、苦鬪、慘霜、虐雪の痕跡を留めなかつた。此の一點に於ては、彼は恐らくは大人の資格があつたであらう。自から基督敎的老紳士を以て居た虞翁さへも、其の諦めのよくして、愚痴を滾さず、敵を許し、敵を忘るゝ點に於ては、彼に就て學ぶ可きであつたらう。

彼は高遠の理想を說いたが、然も彼は維新時代の志士に他ならなかつた。彼の中心思想は、皇室中心主義者で、云はゞ文治的帝國主義者であつた。彼は如何なる程度迄、デモクラシーを理解して居た乎。そは吾人が詳にする能はざる所であるが、然も一國の政治は、民衆の爲めに、民衆の手により、行はれねばならぬと云ふ事は、深く彼の胸底に印したる思想であつたらしい。

彼は早稻田を敎育すると同時に、早稻田から敎育せられた。早稻田大學の最も模

範的卒業生は、恐らくは其の創立者であらう。乃ち彼の如きは、終身の學生だ。不老の老人だ。不朽の老人だ。

尙ほ一言す可きは、彼が家をも身をも顧みざる、維新時代を經由して、隨分放縱なる生活を爲し來つた惡習を蟬蛻し、中年以來、比較的清淨なる家庭の主人公となつた事だ。彼が家庭に於ける好々爺であつたことは勿論、其の老母に對する孝養の眞摯、懇到であつた事は、實に彼の人格を飾る可き、無二の勳章であつた。

公人を論ずるに、私德を以てするは、立論の基調を取り違へたる嫌あるも。私德の光は、公人の信用を厚からしむるに於て、決して無視す可きでない。況んや彼の如きは、單純なる政治家でなく、一代文化の大先達として、民衆より仰望せられたる一人なるに於てをや。

往く所として、可ならざるはなかりし彼の天分は、何れに尤も秀でたのであるか乎。そは容易に斷言は出來ぬが。假りに新聞記者として見れば、彼程の恰當の資格を具へたものはあるまい。彼は手にてペンを握らぬ丈が、記者としては不足だが、其他は實に申分なき記者であつた。予は明治三十二三年の頃、早稻田の新聞研究會に於て、諸君は其の脚下に於て、一の大記者を持つてゐるではない乎と云うた。予は何よりも日本の最大なる新聞記者として、彼を見た。平たく云へば、同業の先輩として彼を見た。而して此の大記者たるとが、彼に於ては最後迄の愉快であり、且つ誇りであつたらしい。

要するに彼は大論客であつた。彼の最後の事業は、東西文明の調和に對する、意見の著作であつたと聞く。而して其の完成せざるを以て、最大の遺憾としつゝあつたと聞く。富貴、功名兩ながら遂げ去り、尙ほ惓々忘る能はなかつたのは、此の世界的大問題の解釋であつた。唯だ此の一事を見ても、如何に八十五翁の彼の頭腦が、淸鮮、鋭敏であつたとが判る。此丈けでも吾人をして、彼に驚嘆せしむるに餘りある。

此の如く彼は明治、大正にかけての幾多の人物中、全く毛色の變りたる怪物であつた。彼の兒分は、固より彼を大偉人と云ふのであらう。乃ち兒分でない者も、決して然らずと反對する理由はあるまい。彼は實に我が日本國民の誇りの一である。恐らくは幾百歳の後迄も、其一であらう。豈に唯だ百二十五歳に止らんや。彼去りて我が大日本帝國は、淋しくなつた。（大正十一年一月十一日）

大隈侯を葬送す

單に日本の文化に貢献した丈でも、大隈侯は、國葬の要請がある。彼を國葬す可く輔弼の臣僚が評定したとて、日本國民の殆んど一人も、異議を持ち出すものはあるまいと思ふ。併しそれは實行せられなかつた。惟ふに定めて理由もあるであらう。今更ら此の場合に、詮議立てをするも、野暮の骨頂だ。吾人は寧ろ國民葬の行はれたのを、却て大隈侯の爲めに、仕合せと思ふ。逆境を恒に順受したる彼は、其の葬送の際にさへも、其の通りであつた。然り國民葬は、國葬よりも、正しく大隈侯其人に適當だ。其の國民的なるに於て、其の普遍的なるに於て、其の民衆的なるに於て。

人間の一生に於て、尤も大切なるは、晩節と、死處とである。此の點に於て、大隈侯は全く申分なかつた。諺に陰德あれば、陽報ありと云うた。然も大隈侯に於ては、寧ろ陽德ありて、陽報ありと云ふ可きであらう。若し彼の缺點を擧げん乎、百瘡千孔、指摘に遑あらぬ。然も彼は民衆を解し、克く民衆に盡した。彼の下半生は、善き意味に於て、實に民衆煽動者であつた。彼は殆んど總ての人の友であつた。而して縱令其の友情は、淺薄であつたにせよ、廣大無邊であつた。故に彼の死するや、知ると知らざると、皆な其の同類を喪うた感をなした。彼の生涯の或る期間は、黨魁として立ち、彼の晩年も、亦た黨派的精神を、全然蟬蛻したとは云ふ可きでなかつた。然も彼の血管は民衆の血管と——宛も水道鐵管が、水

源の川流と相通ずる如く—其の脈絡を保つて居た。此の意味に於て、彼は實に我が國民の大先達であつた。縱令彼の馬前に討死するを本望とする兒分は、多くなかつたにせよ、彼の周圍を包擁する民衆は、滔々皆な是なりであつた。其の消長は、時の都合によるも、彼は概して人氣男であつた。

記者は大隈侯の死去に際して、實に民衆の良心は、智者、富者、權者の良心よりも、信賴す可く。民衆の判斷は、智者、富者、權者の判斷よりも、馮據すべく。民衆の力は、智者、富者、權者の力よりも、確實なるを實驗した。約言すれば所謂るデモクラシーの發現せる眞相を見た。此の實物敎育は、實に大隈侯の死により、自然に、偶然に、天然に露呈せられたる、國民的本能の表章である。多數必らずしも賢智ならず。然も長遠なる算盤の上にて、之を計較すれば、民衆には自から看過し難き本能がある。而して極めて正軌と合致する本能がある。民の聲は必らずしも神の聲でない。民衆は時としては豫言者を殺して、而して後、其墓を建つるが如き、淺間敷事をもする。然も概して云へば、民衆には其の大常識がある。此の大常識や、是を是とし、非を非とし、鷺を鷺とし、烏を烏とする。民衆が大隈侯を其の仲間の一人として、待遇する所以は、畢竟大隈侯が民衆を、其の仲間として待遇したからだ。

爾に出でたるものは、爾に返る。今や大隈侯は、其の葬送の際に於て、正しく其の播きたるものを、收穫しつゝある。國葬の有無の如き、爵位の昇進の如きは、畢竟閑人の閑問題に過ぎぬ。天下は期せずして、此の國民の大先達を、國民葬するのである。

記者は漫りに大隈侯の柩を要して、デモクラシーの說法を試みんとするものではない。然も此の活ける敎訓に接しつゝある、我が帝國の公人は、須らく故人に就て學ぶ所がなければならぬ。富貴、功名何物ぞ。公人たるものは、只だ身を民人と、國家とに竭すによりて、始めて不朽の人物たるを得可きのみ。大隈侯の一生

を乘除し來れば、其の葬送の日の如く、其の光明赫灼なるは、未だ是れあらずと思ふ。（大正十一年一月十七日）

海東老公

嗚呼海東老公薨ず。大は邦家の爲め、小は個人の爲め、眞に哀悼に禁へぬ。惟ふに帝國の重臣、元老として、公を天下後世に傳ふるもの、他に其人あらむ。予や誨を公の門下に奉ずる殆んど四十年。而して吾父淇水翁亦た維新の當初より、公の交誼を忝うした。顧みて二世の誼を懷へば、到底冷嚴なる史筆を、此際に揮ふ能はざるは勿論である。然も默して止む能はざるものあり、故に平生見聞の一斑を綴りて、聊か公の弔詞に代ふ。

松方公は、鹿兒島貧乏士族の四男であつた。公の今日の榮達を致したるは、幸運に乘じたとは云へ、畢竟公の自助、自立の力に由る。公の平生を知る者は、幸運が松方公を作つたと云はんよりは、松方公が幸運を作つたと云ふを、適當と信ずる。

公の自から語る所によれば、少小にして弓馬に志し、其の三昧を得たりと云ふ。特に弓術に到りては、當時の師範役東郷家に於ては、公の精藝を認め、其の後を嗣がしめんと彊めたと云へば、其の上達の程思ひやらるゝ。而して公亦た海事に志し、身を汽船に投じて、機關運用を學び、長崎に遊學した。

公の出身は、島津久光公の側に奉仕したるに始まる。而して維新の當初は、宛も長崎遊學中にて、機宜の措置其の當を得、擢んでられて九州鎮撫使參謀となり、遂に日田縣知事となつた。日田は豐後に於ける幕府領にして、尤も難治と稱せられた。公の此地に長官となるや、正に饑饉に際した。公は百方其の賑恤に從ひ、管内安定した。此地本來、墮胎の惡風行はる。公庶民に諭し、之を禁じ、其の夫人と與に、姙婦を慰問し、其の赤兒を撫育した。此の如く公夫妻の爲めに、天日

を見ずして、暗から暗に葬らる可き者の成長したる者、幾許なるを知らず。彼等成長して後、報恩會を開いて、以て公の夫妻に謝したと云ふ。其の德化の民に及ぶ、亦た知る可きだ。

然も公は百里の材にあらず。公は日田縣に知事として、既に廢藩置縣の建白をしたと云へば、此論は—當時兵庫論と稱せられた如く—必ずしも當時の兵庫縣知事たる、伊藤公のみの意見ではなかつた。否な當初の識者中には、此論は期せずして發生したものと思はる。兎にも角にも公は大久保甲東に識認せられて、中央政府に出で來つた。爾來公の政治的生涯は、明治十一年大久保甲東の死に抵る迄、恒に相ひ追隨して、宛も太陽に於ける月の如き關係があつた。

大久保甲東は、恐らくは幕末より明治の初期にかけて、日本の誇りとす可き、大政治家であらう。若し明治政府の柱石と云ふ語が、その儘當て篏る人あらば、その人は只だ甲東一人のみと云ふも過當であるまい。維新草創の際に於て、彼在り政府重く、彼無し政府輕し。大久保、西鄕、木戸、三條、岩倉の五人は、何れも一代の元勳であるが、眞に建設的政治家の資格を具備したるは、岩倉と大久保のみ。其中に於ても、大久保を推して、尤とせねばならぬ。而して我が海東老公は、實に甲東門下の第一人であつた。

公は中央政府に出身の當時より、專ら內務行政、及び財政、殖產興業等の方面に努力した。明治六年征韓論破裂以來、廟堂の風色は、幾回か變遷を經たるも、一言して大久保內閣であつた。而して其の兩翼には大隈、伊藤の兩雄があつた。然も彼等は大久保に取りては、寧ろ親しき政友であつたが、外樣であつた。その心からの政友、及び股肱は、恐らくは海東公を第一としたのであらう。甲東の參朝するや、概ね公の邸に徑し、公を其の馬車に伴ひ、同乘したりと云へば、其の親密の程度は、推して知る可きであらう。

當時政府の重なる事業の一は、地租改正であつた。而して公は專ら其事に從うた。

明治八年大隈の下に、大藏大輔に進むや、恐らくは一方に於ては、大隈の保佐役たり、他方に於ては、大久保の爲めに、目付役となつたであらう。當時の大隈は、後年圓熟の大隈にあらず、其の勇鋭にして傍若無人の施說、行動は、屢ば儕輩、及び世間の批議を招いた。然も材を愛するに厚く、材を惜しむに深く、材を用ふるに急なる大久保は、如何なる缺點あるも、大隈を捨つるに忍びなかつた。故に公を以て其の足らざるを扶け、餘れるを制せしめたものと思はれる。

大久保甲東の眼に映じたる公は、安全第一の人であつた。而して此の安全第一が、公の明治天皇より信寵を渥からしめたる所以、亦た公をして今日あらしめたる所以と思はる。公は如何なる場合も、脚は地を離れぬ人であつた。

明治八年佛國萬國博覽會に際し、渡歐するや、公の眼界は一新し、一變した。公は殊に財政經濟に就て、見學する所少からず。就中佛國經濟の大家レオン・セ||と交り、親しく其の意見を聞き、頗る悟る所あり。此の如くして公の明治時代の一大財政家たる基礎は、出で來つた。而して其の手腕は、明治十四年十月、大隈の後を承け、自から大藏の長官となりて、不換紙幣を一變し、硬貨制度を確立したるに就て、證明せられた。

明治十年西南の役以來、銀紙の差は、漸次に著しくなり、政府が銀貨を賣り出せば、出す程、燒石に水の勢にて、到底濟ふ可からざる狀態に陷つた。此に於て公は廟議を定め、一方には紙幣を鎖却し、他方には正金銀行、其他の爲替方法も、銀塊を蓄積せしめ、極めて緊肅の政策を勵行し。此れが爲めに、全國は一時不景氣に陷り、怨嗟の聲、市衢に滿るも意とせず。鋭意初一念を徹底せんことを勗めた。

當時廟堂には、多少政策緩和の議生じた。然も公は斷々乎として、之に應じなかつた。公曾て記者に語りて曰く、當時民間に於て、予の政策を贊助したる者は、福島縣の佐野理八と、熊本縣の山田武甫のみと。山田は洪水翁の親友にして、記

者の師友の一人だ。

公は正金銀行を善用したるのみならず、明治十五年十月には、日本銀行を創立し、之をして兌換券を發行せしめ、茲に兌換制度の根柢を定め、且つ金融の中央機關を設けた。而して軈て公の目的は達せられ、曾て銀貨一圓もて、紙幣一圓八十錢と交換したるものが、今や銀紙同價となつた。公曾て予に語つて曰く、若し明治天皇の聖斷なくんば、到底此の事業は覺束なかつた。唯だ陛下聖斷一定、動かざる山の如く、遂に微臣をして、其の功を收めしめ給うた。而して如何に陛下が御滿足であらせられたかは、天顏喜びありて、親しく硬貨を手にして、公に賞授し給うたと云ふ一事を以て、拜察し奉ることが能ふ。

明治財政史上の巨頭は、井上、大隈、松方である。如何なる史家も、此の三人を無視して、明治財政史を編することは能はぬ。然も其の尤も功果を收めたのは、三人の中公である。此れは幸運と云へば幸運であるが、亦た公が安全第一の人であり、且つ其の執著の力が多大であり、而して他と調和し、巧みに暗礁の間に、能く柁を取りたる、練達の手腕に歸せねばならぬ。

公の政治的生涯は、寧ろ順境であつた。其の明治二十四年五月首相となりて、內閣を組織したるも、自から求めたるにあらず、自然の順序此に至つたのだ。然も意外なる不幸は、直ちに天から墮ち來つた。そは露國皇太子事件だ。やがて又た岐阜、愛知の大震災が生じた。斯くて議院の解散を餘儀なくせられた。而して明治二十五年の初に、所謂る選擧干涉なるものが、日本の憲政史に始めて出で來つた。

吾人は今茲に强ひて、回護の筆を揮はんとする者でない。但だ公は大藏大臣としては、當時に得難き一人であつたが、首相として閣僚を統率する點に於ては、恐らくは少しく慊らざる所あつたかと思ふ。當時の閣僚、一方に品川あり、他方に陸奥あり。何れも一筋縄でも、二筋縄でも、容易に駕御し難き代物であつた。惟

ふに當時の選擧干渉は、全く內務一省の仕事であつたが、公は首相として、其責を負はねばならず、又た其責に任ず可き理由があつた。

明治二十七八年役に於て、公は冥々の間、献替少くなかつた。而して臺灣領有の如きは、公の最も率先して唱へたる論であつた。償金問題、遼東割讓問題等に就ても、公の建言は少くなかつた。然も公と伊藤公とは、其の意見往々扞格した。而して幾もなく伊藤內閣の後を承けて、玆に松隈內閣は出で來つた。此れは明治二十九年八月にして、從來長官であつた大隈は、閣員となり、次官であつた松方は、首班となつた。其の組織が既に不自然である。然も大隈にして、其の環境に順應する手練あらば、それも差支ないが、這漢決して第二流に安んずる能はず。加ふるに一方には樺山、高島の薩派あり、他方には議論尤も多き進步黨あり、禍機は既に組織の當初から、隱伏してゐた。

然も公は此の面倒なる內閣に首班として、金貨本位の政策を斷行した。當時我が朝野の財政家中に、之を無謀の暴斷として、其の結果を危んだる者鮮くなかつた。然も財政上に於ける公の自信力は、普通の政務に對するそれに比すれば、十倍を加へた。公は國際的經濟上の地步を高むるには、國際的貨幣本位の仲間入りをせねばならぬ所以を熟知し。而して日本の財力が、能く此の目的を達し得可きを確信し、遂に之を斷行した。卽ち此の金貨本位制度の採用は、前の硬貨制度確立と共に、公の日本財政史上に於ける、二大功績と云ふ可きものであらう。其の金貨本位制度確立の効果は、覿面に三十七八年役に現呈せられた。

明治三十一年の末、第二山縣內閣の成るや、公は入つて大藏大臣となつた。爾來公と山縣とは、大體に於て殆んど其の趣舍を同うした。公は元來大久保門下として、伊藤と相善つた。然も其の明治二十七八年役以後は、往々其の意氣投合を缺き、却て山縣と總ての點と云はざるも、多くの點に於て、相ひ一致した。而して爾後姑らく閑地にあるや、米國を徑して、歐洲に遊び、西伯利を經由して、歸朝

した。

明治三十七八年役の創始に際し、和戰の會議を、明治天皇の御前に開くや、陛下は財政に就て、深く憂慮し給うた。然も公と井上とは、必らず能く就すことあるを保障した。而して此の戰役の前後に竭したる公の功勞は、明治天皇の嘉稱し給ふ所となり、卿に賜ふ爵位は、朕親しく之を與ふと、面宣し給うたとは、記者の仄聞する所である。此の如くして公は伯爵より侯爵に躋り、大勳位に叙せられた。明治天皇崩御以來、公は元老の一人として、恒に國家の大事に際し御諮詢に奉答し、啓沃の誠を致した。晩年内大臣として、其の八十有餘の老軀を捧げて、奉仕に勗めた。東宮殿下の海外御渡航の如き、又た攝政とならせ給うたるが如き、何れも公の献言に基くと云ふ能はずんば、献言亦た與りて力ありとは、仄聞する所。唯だ事密勿に關し、之を詳に語る能はざるを憾みとす。而して其の蹇々匪躬の晩節は、遂に公爵に陞らしめた。而して是亦た水到渠成の自然的作用のみ。

公の出處進退は、明々白々、復た記者の文飾を要せず。而して公の勳功は、昭々として國史に存し、記者の特筆を要せず。然も公の忠愛君に仕ふの丹誠と、其の利用厚生、家國を益するの熱心と、而して諄々人を導いて倦まざる雅懷とは、一たび公に接する者は、必らず之を會得せずんばあらず。公や壯にして島津久光の側に仕ふ。故に其の態度穩妥、其の高貴に接する、禮容自然に備つた。伊藤、山縣は重臣として、明治天皇の優待を忝うした。然も公は明治天皇の親臣として、其の寵遇を忝うした。公の天皇に咫尺するや、侍臣皆な其の時間の長きを虞れた。是れ至尊の公に對して、其の刻の移るを覺え給はざるの致す所、君臣の遭遇以て知る可し。

維新元勳多しと雖も、若し多福多祥の人を擧げば、未だ公に若く者はない。公の清福の第一は、賢夫人を得たることだ。薩摩には從來賢夫人少くない、然も松方公爵老夫人の如きは、薩摩中に於ても、尤も稀に見る一人であつた。老夫人の

一身は、奉仕的生活を以て始終した。其の必然の結果として、雍容和穆、恒に春風駘蕩の家庭を得た。而して更らに多くの孝子、順孫を得た。名門の子弟多くは不肖とは、少しく過激の言に失するも、事實往々然る者がある。然も松方家に至りては、其の子弟何れも一家を成して、公の大なる門戸を、彌よ大ならしめてゐる。而して公は更らに異常なる健康の持主であつた。身健にして良妻と偕にし、子孫賢にして、功成り、名遂ぐ。明治、大正の間、其の人物の大小、勳業の高下を論ずれば、或は公に駕する者あらむ。然も人生の清福を享受するに於ては、何れも公の靴の紐さへも結び得る者は、多くあるまい。

公は容貌魁偉、然も自然に福相あり、藹然親しむ可し。溫恭能く人を容れ、未だ曾て疾言遽色せず。人或は公を以て、一個の好々爺と做す。然も公や常識に饒み、亦た能く人の情僞を察す。其の欺かる可きが如くして、容易に欺かれず、其の冐さる可きが如くして、容易に冐されざる、惟ふに中に一種の明智存する者あるが爲めならむ。公は善人である、然も決して單一の善人でない、政治家としての善人である。公は實に見掛け以上の聰明の人であつた。此れは親しく公を知る者でなければ、知る能はぬ。而して公が自然に思慮に富み、其の公私の措置、概ね宜しきを得たる、古人の所謂る有れども虛しきが如きもの、公に於て之を見る。

公は幼にして自から刻苦す、其の自制に於て、第二の天性となつた。而して王陽明の學に於て、心契する所があつた。明治二十七八年の役、公の大本營地の廣島にあるや、予亦た在り、屢ば公を訪ふ。公從容として語りて曰く、陽明の句に、『靜定功夫忙裏試。和平氣象怒中看。』と、君乞ふ之を三思せよと。爾後予は公に此句を書せんことを請ひ、今に至る迄、楣間に揭げてゐる。但だ不肖老去りて、尙ほ公の誨意に副ふ能はざるを慚づ。

公天資和易、其の財政論に於ては、新井白石に私淑し、歷史に於ては、賴山陽を喜ぶ。而して平生の嗜好、一に臨池にあり。其の書法大師より羲之に出入す。最

近十餘年、公の書法頓に面目を改む。頃ろ自から愛して、多く他の爲めに書せず。但だ予を以て公の書法を解する一人となし、爲めに國民新聞社の扁額を書せんことを諾せらる。蓋し公の先書、昨年九月の震火災に燒失したれば也。然も遂に果さずして長逝せらる。

公の寛大なる、未だ曾て政見の異同を以て人を責めず。故に明治二十五年松方內閣の政策を、毎日の紙上に攻擊する際にも、予は尙ほ平然として公の官邸に往來した。爾來今日に至る迄、未だ曾て國民新聞の論調に就て、予に苦情を持ち込まれたることなし。但だ予が高論崇議して、實務に迂なるを憂ひ、屢ば予に向つて社運の盛衰如何を問ひ、若し答ふるに社運隆昌を以てすれば、欣然として喜ばれた。而して昨年恩賜賞を受くるや、公は御身の父上に、之を聞かせたしと云はれた。記者は既に父母を亡ふ、長上として仰ぐ可きは、只だ松方老公と、予の母の妹矢島楫子のみ。然も公は九十翁、叔母は九十一嫗、而して今や公を喪ふ。

單に予一個に取りても、實に過去と全く緣が斷絕したる心地す。感極りて裁する所以を知らず。文字倫次なし、豈に敢て公の德を頌すと云はん哉。

（大正十三年七月二日）

海東老公を葬る

松方老公の、明治、大正の間に於ける、元勳、長老としての一斑は、記者既に之を語つた。今日は只だ老公國葬の當日なるが爲めに、單に哀悼の情を表するに止まる。

天は無代價に、何物をも人に與へず。一方に與れば、必らず他方に取る。乘除の天算は、實に人算の及ぶ所ではない。然るに我が松方老公は、殆んど人間として贏ち得可き、總ての物を得た。齒德與に崇く、祿壽兼ね全し。乃ち人間の淸福は、松方家の一門に集つたと云ふ可き程であつた。明治、大正の聖代に於て、若し單

に一事一物を以て較せば、或は老公の上に出でたる偉人、豪傑無しとせず。然も老公の如く、一切の至福を、遺憾なく享受したる者、それ幾人かある。

公は壽九秩に躋りて、最後迄殆んど全體の、官能の健全を保有した。位は人臣を極め、望は中外に隆く、門戸裕饒、賢子順孫、膝を繞る。人或は公を目して、大正の郭子儀となす。然も郭子儀は、其の兒孫の分量に於て、或は公の上に出たるものあらむ。然も其の品質に於ては、恐らくは我が老公の競爭者たる能はざる可し。古語に所謂る陰德あれば、陽報あるもの、我が老公に於て之を見る。

本文の記者は、我が父執の故を以て、白面一書生の時代より、白頭還曆翁の今日に至る迄、恒に我が老公の教誨を忝うした。少年時代には、狂愚自から恣に、老大依然頑骨を改めず。過去三十有餘年、自から顧みて、我が老公の芳情に辜負する多きを怍づ。但だ君國に報いる一片耿々の丹心に至りては、幽明を隔て、、敢て公の善導に違はざるを矢ふ。（大正十三年七月十三日）

桂公長逝後滿十三年

今更ら歳月推移の速かなるに驚きぬ。大正十四年十月十日は、桂公の長逝後滿十三年とならんとは。此の間に於て、逝くべき者は、殆んど逝いた。若し桂公と同時に、政界に馳驅したる老輩を求めば、今日は只だ西園寺公と、山本伯とを數ふるに過ぎず。

人皆な桂公は幸運兒と云ふ、然も其の幸運は、彼の努力の結果であつた。彼は儕等が少將級である際に、漸く大尉として出身した。而して彼が陸軍に於ては大將となり、文官としては總理大臣となりたる、何れも成る可くして成りたるもの。決して詭遇でもなく、僥倖でもなかつた。

古人は棺を蓋うて論定ると云ふ。然も桂公の末路は、實に蕭條であつた、否な寧ろ悲慘であつた。十三年後の今日、世論は猶未だ十分の公正を以て、桂公に對す

るの機が熟せぬ程である。

併し此れは強ち世間の罪ではない。實を云へば其の晩節に於て、桂公は餘りに調子に乘り過ぎた。彼は退一歩の際に、却て進一歩した。彼は政治に於て、最も慮かる可きは政敵でなく、寧ろ政友である。卽ち政友間に於ける競爭、嫉妬であることを忘却する程、增上慢となつた。彼の最後に得たる公爵は、殆んど彼の政治的生涯を犧牲とす可き程の、高き代價を拂うた。何事にも賢しこく、世態人情學の大博士とも云ふ可き桂公が、何故に斯る代價を拂うたかは、實に我も人も意外とした る所。

然も總ての事を乘除しても、彼の國家に竭したる功勞は、識認せねばならぬ。記者が卽今本紙に連日記載しつゝある。三十七八年役の外交に關する、長篇を通讀するの君子は、必らず其の一斑を諒解するに餘りあらむ。

桂公は決して一敗起つ能はざる 弱蟲ではなかつた。彼にして若し十年の壽を長くせしめば、必らず其の晩節を、赫灼たらしむるものありしならむ。記者の痛嘆するは、其の挫折ではなく、挫折して再起するの機會を得なかつた一事だ、而して唯だ此の一事だ。

彼は能く民衆を解した。彼は能く世界を解した。彼は能く天下の趨勢を解した。彼にして歲月を假さば、內外の政策に就て、必らず自から新たにし、且つ國家を新たにするの抱負を實行し得たであらう。

今更ら繰り返しても、云うて還らぬこと。然も此の長逝後滿十三年に際して、自から默止する能はざるものがある。故に聊か所感の一端を記して、天下の有心者に告ぐ。（大正十四年十月十日）

山公遺烈を讀む

山縣老公の側面觀

『山公遺烈』は、高橋箒庵君の、故山縣含雪公の側面觀である。箒庵君は、第一次山縣内閣の頃から、公の知を忝くしたる一人にて、晩年には殊に風雅の道にて公に親近したれば、其の親しく見聞したる所を語るに於て、興味の饒かなるは、云ふ迄もない。

凡そ世の中に含雪公程、多方面の趣味を持たる人も少く、又た含雪公程、複雜の機關は鮮い。されば公に就て語れば、十人十色、百人百色、とても語り盡すものはあるまい。只だ此れだけにても、公は實に一代の傑物であつた。

本書は時として、天下國家の大事に渉りたるが、先づ概して公を文雅風流の方面から眺めてゐる。而して此の方面は、公の最も美なる一面にして、然も之を語るに、箒庵君の如きは、最も適當の一人であらう。

公は世の所謂る茶人ではなかつた。されど其の風流は、古人の『不二風流一處也風流』で、到底月並的茶人の、企て及ぶ所ではなかつた。

此點に於て、公と對照す可きは、故大隈侯だ。大隈侯も決して殺風景ではなかつた、決して俗惡ではなかつた。されど侯の趣味は、手短かに云へば、先づ誇大と、露骨とであつた。善く云へば、大名趣味であつた。今少しく譽め上ぐれば、西洋流の貴族趣味であつた。

然も山縣公の趣味は、若しより高尚と云ふ能はずんば、より幽雅であつた、より洗錬せられた。而して公は何事にも、他の足跡を辿らず、他の籬下に立たざる如く、此の方面に於ても、優に一家の風を成してゐた。

和歌や、謠曲や、仕舞や、漢詩や、何れも決して我流ではなかつた。其師承する所あつた。然も到底其の師範者の注文通りには參らなかつた。公は彼等の思ふ儘の型に入るには、餘りに其の個性が强過ぎた。而して其の筆跡の如きも、自から山縣の一流を爲した。

山縣公の夙好は、築庭にあつた。夙好と云ふは、維新前奇兵隊長として、防長の

間に馳驅したる頃、既に吉田山の南麓に松竹洒然たる小屋を築き、無隣庵と號した。此れが無隣庵一世にして、洛東南禪寺畔の無隣庵は、第二世だ。而して椿山莊、而して古稀庵、而して新椿山莊。公の在る所、必らず庭あり、庭の在る所、必らず水あらざるなし。

公は實に水を愛した。其の小田原古稀庵の如き、清泉濺々として、階除を繞り。其の易簀の室に於てさへも、尙ほ微かに泉聲を聽き得る程であつた。

仁者は山を樂み、智者は水を樂む。公も亦た其の樂む所を推せば、智者と云はねばならぬ。されど公は智者と評せらるゝを、何よりも好まなかつた。記者が曾て公を德川家康に比したとさへも、公は喜ばなかつたと云ふとか、公の秘書入江貫一君の、公に關する冊子に揭げられてある。併し何人も、公を智者にあらずと云ひ得る者はあるまい。公自身さへも。

凡そ世の中に、博く聞く者は、自から主張なく、自から主張ある者は、博く聞かず。自力信者は、他力を賴まず、他力信者は、自力を賴まず。但だ含雪老公に至りては、如何なる場合も、廣く諮り、多く詢ひつゝ、尙ほ山縣一家の立前は、決して崩す所なかつた。其の自我の城郭は堅固なれども、其の城門を開いて、一藝一能の士を驩迎した。天下、國家、軍事、外交の上に於ても。將た和歌に於ける、一句、一字、庭園に於ける、一木、一石の排置に付ても。何れも上述の本領を發揮した。

智者未だ必らずしも冷血でない。公は癇癖强く、感情激しく、情熱亦た炎々であつた。公が冷靜の態度を維持したのは、非常なる意力と、非常なる克己とを要した。然も時としては、尙ほ往々其の破綻を暴露した。されば記者が公を智者と云うたのも、決して冷血漢と云うたのではなかつた。箒庵君の此の書中にも、若干其の消息を漏らしてゐる。

武人錢を愛せずと云ふも、必らずしも然らず。英國のマルボロ公の如きは、死せ

る兵士の俸給すら掠めたと、マコレーは非難した。若し山縣公の勢力と位置を以て、富を得んとせば、如何なる富者ともなり得られたのであらう。されど公は、飽迄金錢の力を知りつゝ、自から私するを屑としなかつた。公は自から記者に向つて、洋服細民と云はれた。固よりそれ程ではなかつたが、公の地位からすれば、決して富者ではなかつた。其の晩年、椿山莊を藤田男に割愛したるが如きも、身後の計の爲であつたらう。此の金錢慾の淡泊と、儉素の點とは、本書に能く發揮せられてゐる。

記者は明治の昭代に成長し、不幸にして其の元勳たる三條、岩倉、西鄕、大久保、木戸の諸公に謁するを得なかつたが、尙ほ若干の遺老、長者を見るを得た。然も記者が見たる中にて、山縣公程深甚なる印象を與へたものはない。一切を乘除して、公は實に歷史上に於ける、偉大なる日本人の一である。

固より斯る人物の例として、其の缺點も、短所もある。あるのみならず、それが世間に擴大せられて、指摘せらるゝともある。されど山縣有朋を除却しては、明治の歷史は、完備しない。

本書の中には、記者が箒庵君と共に、含雪公に陪して、表慶館の十大佛畫を見、席上の偶談が、端なく箒庵君をして、其の珍襲せる足利義昭、織田信長の協定古文書一軸を、記者に贈らしめたる一節がある。如何にも其通りである。該文書は貴重史料の隨一として、成簀堂中に護持し。之を展觀する每に、坐ろに當時に想著する。

本書は山縣公の側面觀として、最も信憑す可き一。他日公の正傳成るの日は、必らず此書に憑據する所多からむ。前には入江貫一君の著あり、今亦た箒庵君に此著あり。公は實に晩年蕭條の感あつたが、然も其の身後に於ては、公に就て語るもの、何れも公の大を頌し、美を讃せざるなし。是れ畢竟公が、後進を愛したる餘韻であらう。（大正十四年五月）

杉浦重剛翁

杉浦重剛翁逝く、翁の蒲柳の質をもて、七十歳の壽を享けたのは、寧ろ翁の自制、修養の結果であらう。然も大正の現代に於て、翁の如き志士的學者と云はん乎、學者的志士と云はん乎。教養と氣骨とを、兼備したる人物を喪うたのは、寔に嘆惜の限りである。

翁は琵琶湖畔膳所の産、京都に出て、岩垣月州に就き、漢籍を修め。明治の初期、貢進生として、東京に出でゝ、大學南校に入り。命を奉じて英國に留學し、マンチェスター市のサー・ヘンリー・ロスコーの門下として、秀逸の一人であつた。然も過度の勉學は、其の健康を害し、爾來一身を育英の事業に投じ、以て今に至つた。

翁にして若し化學の專門家たらしめば、其の造詣は、必らず利用厚生の道に於て、裨益する所多かつたであらう。然も翁は中年以後は、寧ろ日本流義の學者として世に立つた。ロスコーの化學者にして政治家であり、議員となつたが、然も其の本領は化學者であつた。翁は初期の議會に出でたが、間もなく之を能め、爾來民間の學者的志士として、恒に世道人心の爲めに、献身的努力を事とした。

其の晩年に於て、東宮殿下に侍講し、且つ未來の東宮妃殿下の御教養に奉仕したるは、翁の素志を爲すに於て、庶幾かつたと云はねばならぬ。然も或る問題に就て、翁が綱常彝倫の大道に據して、斷々乎として、元老高官を對手として、其の所信を貫きたるは、眞に其の學ぶ所に負かずと云ふ可く。天下清議の士の齊しく翁に向つて、感謝措く能はざる所とす。

吾人は翁の學識や文藻に就て、別段感心するでない。但だ其の志士的學者、學者的志士の風度、氣品に就て推服する。日本にも從來は這般の學者あつた。例せば柴栗山先生の如きが、其の一人であつた。然も今や則ち亡し。吾人が翁の長逝を

慟哭するは、單に斯人の爲めのみにあらざる也。（大正十三年二月十六日）

伊集院彥吉君を弔す

男爵伊集院彥吉君逝く。君の死は、必らずしも天下の大局に、關係ありとは思はぬ。されど薩摩男兒の良好なる典型は、此れが爲めに一人を少いた。

薩と云ひ、長と云ひ、藩閥鄕として久しく世人に斥けらる。然も日本帝國の見地からすれば、薩もなく、長もない。彼等が維新以來橫暴を働きたるは、掩ふ可からざる事實だ。併し橫暴は必らずしも、薩長のみの罪ではない。國家の要求からすれば、一人の人才でも欲しくある。伊集院男の如きは、決して才の美を以て稱す可きでない。されど彼は薩摩氣質の、比較的醇厚なる代表者と見る可きであつた。何人も彼を知る者は、彼を愛するを禁じ得なかつた。

彼は何處やら輪郭が大にして、其の茫乎たり、漠乎たる中に、何となく一種の或物を持してゐた。動もすれば他人の小股をすくふ、翩々たる輕薄才子流行の世の中には、如何にも珍らしき人間と云はねばならぬ。

彼は天津總領事として、直隸總督であつた袁世凱と、相ひ應酬し、相ひ提携した る當時は。日本の對支外交の花でもあり、又た彼の花でもあつた。されど柳の下に、何時も鰌は居らぬ。爾來彼は大いに其力を伸ぶる機會を得ず、偶ま之を得たるも、遂に其力を伸べずして止んだ。

彼は要するに、一種の腹藝的の人物であつた。彼は一見無能、無藝、外交技師としては、寧ろ拙劣の極の如く見えた。然も彼には彼獨特の腹藝があつた。此れは恐らくは、容易に他の追隨を許さなかつたであらう。今日の薩摩男兒にして、彼が如き腹藝ある者、それ幾許かある。惜しみても惜しむ可き夫。

（大正十三年四月二十九日）

快男兒横田千之助

横田千之助君の死は、實に意外であり、意外であるだけ、愈よ世間に深甚の衝動を與へた。

若し惜い事と言ふ言葉が、最も適當に用ひらるゝ場合あらば、横田君の死に對してゞあらう。何人も君が死を惜まぬ者はない。何となれば君は今日に於ても、其の位地以上の働らき役者であり、且つ其の未來は、更らに嘱望せられてゐたからだ。

我が政界には、今日でも若干の人物、若しくは人物らしき者がゐる。されど其の七八分通りは、午後二時以後の人々だ。彼等は過去の人であり、寧ろ過去の餘光によりて、今日ある人々だ。但だ横田君は午前十時の人として、今後に必らず何事をか做すであらうと、期待せられてゐた。此の期待が果して其通りに出來た乎、

復た裏切られた乎、そは最早問題ではない。何れにしても横田君の死は、此の期待の寂滅だ。世人が横田君を惜むは、單に彼一個人の爲ではない。

横田君は今尚ほ成熟し了らざる政治家であつた。世人は少くとも、彼に今後の進境を期待してゐた。彼は星亨を中學校とし、原敬を高等學校とし、而して今や大學に入りて、自修の課程を踐みつゝあつた。彼が才能、機略、元氣は、何人も之を認めてゐた。是れ以上に吾人が認めたるは、彼の脈搏が天下の大勢に觸れ、彼の呼吸が民衆の追求に通ふたることだ。彼は間違へば、煽動政治家となりかねまじき漢であつたが、善く出來上れば、立派なる帝國の宰相ともなり得べき、素質を具へてゐた。いと惜しき事と云ふは、此れが爲め。いと惜しき事と云ふは、此れが爲め。

横田君の死の打擊を、直接に被るは、政友會であるが、其實は政友會のみでなく、現内閣だ。所謂る三派協調の楔子として、横田君の役目は、今後何人が勤む

可き乎。甚だ覺束なく感ぜらるゝ。惟ふに彼の死によりて、少くとも若干の波紋は、政局の上に生ずるであらう。されど差寄りの問題は、普選と貴院改革の兩件だ。此の二大要綱は、横田君の徹底力と、推拓力とに待つ、最も多大であつた。然るに此際に於て斯人を喪ふ、不幸是れより大なるはなし。されどせめて横田君の弔合戰としても、是非此の二大要綱だけは、之を實行せねばならぬ。花も、弔詞も、横田君の未死の魂に取りては、此れ以上の手向けはあるまい。

（大正十四年二月六日）

實業家の氣品

和田豐治氏を弔す

實業家の本分は、金贏けの上手のみではない。金贏けの上手は、實業家には當り前の事。それが下手では、到底實業家の資格は無い。

實業家に取る可きは、其の能く集むる力と、能く散ずる力である。其の富を作るの材と、富を用ふるの材と、兩立する所に、實業家の妙趣が發揮せらるゝ。而して更らに其上に、一種の高尚なる氣品なるものありて、茲に花もあり、實もある實業家が出で來る。

吾人は和田豐治氏の死を、世人が惜しむの偶然ならざるを見る。若し單に經營の材を求めば、和田氏以外に、其人なしとせず。然も彼は其父が漢學者であつた丈に、自から一種の氣品を具へてゐた。彼の大膽小心と、其の統率、組織の能力とは、自から彼をして今日あらしめたるに相違あるまい。併しそれ以上に、彼をして今日あらしめたるは、彼が然諾を重んじ、後進を愛撫し、其の行徑が、利己本位でなく、奉仕的生活を以て、始終したりと云ふに歸著せずんばあらず。

親孝行などは、古めかしき話なれども、美事は昔も今も同一だ。蓋世の英雄クロンウェルが、其の老母に孝養したるが如き、今尚ほ其の奥床しき心を偲ぶ。和田

君が其の老母の承歡に、心を盡したる一事は、彼を知ると、知らざるとに論なく、何れも彼の美德とせぬものは無い。惟ふに彼が此の老母に先つて逝いたのは、彼としては終天の遺憾であつたらう。

吾人は多くの意味に於て、和田氏の死を悼む。然も其の重なる一は、彼が如き氣品ある人物を、實業界より失うたることだ。和田氏の後に來る諸君、熟圖して可也。（大正十三年三月八日）

德川賴倫侯を弔ふ

德川賴倫侯の死は、必らずしも國家の大損失と云ふ可き程の事ではない。然も華胄界に於ける、一個の人格者を失うたることは、嘆惜するに餘りあり。

紀州家は、三家中の一にて、然も其の財力に於ては、三家中の第一位かも知れない。賴倫侯は、田安家より入りて、之を繼ぎ、其の紀州家の家格と、富とに相應するだけの行動をした。

南葵文庫や、史蹟名稱保存會や、圖書館協會や、凡そ社會の敎化、人文の進步に補益する事業に、侯が其の力と財とを愛まず竭したるとは、華胄界の人としては、良とに珍らしと云ふ可きであらう。

記者は賴倫侯が、幾許の政治的能力の、所有主であつたかを知らない。されど侯は小心翼々、極めて責任觀念の强き人にて。他の世の中を茶化して、自から得々たる、擬新人や、不良貴公子とは、全く其科を同うせざるを知つてゐた。

若し日本の華族が、悉く賴倫侯の如き人ならば、國民の華族に對する感情は、必らず現狀と大いに殊なるものがあつたであらう。賴倫侯は、餘事は扨て置き、溫良、恭謙、眞に良好の紳士であつた。其の性格は、必らずしも同一ならざるも、此點に於ては、蜂須賀侯爵の如きが、宛も其の匹であらう。

華族の將來は、我が社會上の一問題である。而して之を解決する、第一の要素

は、華族彼れ自身である。別言すれば華族を活かすも、殺すも、華族自身の態度如何による。而して賴倫侯の如きは、實に華族を活す側の、重なる一人であつた。賴倫侯の仕事も、或は半は道樂と云ひ得ないともあるまい。されど侯の考古的、博物的、文敎的、社交的趣向は、道樂としても、寧ろ善き意味の道樂であつた。記者は單に賴倫侯其人の爲めに惜まず、華族なる一階級の爲めに惜む。

（大正十四年五月二十七日）

京都同志社の一先生

年を取るにつけて、一の悲みは、我が尊敬する先輩、親愛する故舊の、漸次に減少するとである。記者は頃ろ特に此感を切にする。成島柳北は『青雲黃壤舊知少く、綠酒紅燈新感多。』と歌うたが、綠酒紅燈に綠なき記者の如きは、猶更ら舊知の減少を味氣なく思ふ。

此際に於て、一の佳信を齎らしたるは、京都同志社のラーネッド先生の金婚式の賀が、去る七月七日に、擧行せられたるとだ。殊に本年は、先生の來朝五十年目に相當し、先生の齡七十七に躋られたるは、旁た以て欣快の至りである。

記者が幼少の際、先生として師事したる人は、今や殆んど無い。記者は明治九年より十三年迄、足掛け五年間、京都同志社在學中、幾多の外人敎師に接したれども、眞に吾師と云ふを敢てする者は、只だラーネッド先生一人あるのみ。記者が先生を知りたるは、十四歲の時にして、先生が三十歲前後の際であつた。恐らくは先生にも、エール大學卒業後の、ほやゝゝであつたらう。

先生を深く知らざるものは、先生を一種の偏人、奇物視する者がある。先生は規則其物であり、能率其物であり、精勵恪勤其物である。昔は漢の霍光が、禁闥に出入する二十年、未だ其足ぶみの場所を違へなかつたと云ふが。先生も五十年間、今出川の自宅より、同志社に通はれるに、全く此の如しだ。

先生は、新英州の家柄と聞いてゐた。何處やら上品な所がある。其の一種の童顔には、子供らしき、若々しさがある。其の英語も、日本語も、先生一流の調子で、聞く人をして異常の感をなさしめた。世には長舌と云ふ語があるが、先生のは短舌ではあるまいかと、疑はしめた。今も其通りであらう。

記者の對外思想は、最も多く同志社在學中に養はれた。露骨に云へば、當時外人教師などへは、毛嫌する譯ではないが、成る可く近かぬことゝしてゐた。但だ先生の教場には、心から愉快を以て出席した。記者をして史學、及び經濟學の興味を長養せしめたるもの、先生に負ふ所、決して鮮少ではない。

先生は神學、聖書學は勿論、政治、經濟、歷史、其他凡有る方面に興趣を持つてゐられた。時には運動の教師迄も、自から勤められた。

先生の博識は、何人も異論なき所。然も人の先生に質問する毎に、予不知と答へた。予不知は、殆んど先生の綽號となつた程だ。

先生は篤學の士、而して又た人を誨へて倦まざるの學者。然も其の事務に堪能にして、計數に熟達したる、會社の支配人も出來れば、特に監査役として、天下一品であらう。然も先生は名も求めず、利も好まず。兀々として、其の一生を、日本の靜寂なる平安に送りつゝある。老の將さに至らんとするを知らずとは、先生の謂であらう。

記者が、コブデン、ブライトの名を聞いたのも、先生の教場であつた。記者が『國民雜誌』を購讀したるも、先生の手を藉りてのことだ。記者が無用を厭ひ、能率を擧ぐるの生活を目標とする、亦た先生に學ぶ所少くない。但だ先生の隱德に對しては、記者は階して猶ほ及ぶ可からざるの感を懷く。

先生は木强人の樣だ。然も先生は、信仰を衒はざるも、信仰の人だ。先生の外皮には、淸教徒的の硬質あるも、其の一皮を剝げば、眞に愛の宗教を解得する基督者だ。記者は未だ先生の愛に浴せざるも、斯く認めてゐる。先生よ多幸なれ。

救世軍と山室君

（大正十四年七月十七日）

（山室君の英國行を送る演說筆記）

滿堂の各位、本夕山室大佐の英國行送別會に列し、蕪辭を陳するを許されたのは、良とに欣幸の次第であります。私は去る五月二十九日附にて、救世軍本營なる山室大佐よりして、左の一書を受取りました。

小生が救世軍に投じてより滿三十年（當年秋にて）又二人乘の人力車に同乘して、新富座の裏の敎會堂に御案內申上げ、青年會の演說をして戴いてより三十六年……小生としては、此際先生より、假令僅でも御高話を拜聽するを得候へば、身に餘る幸福に有之云々。

如何にも感激に滿ちたるお言葉で、斯くて私も欣然として、罷り出でた次第であります。

私と山室大佐とは、三十六年以來の知己であります。私の惠まれたる友人の中、基督敎主義の社會事業に、献身せられたる方々の中にて、最も敬服したるは故石井十次君、留岡幸助君、山室軍平君であります。石井君は既に昇天せられ、留岡君は漸く還曆を過ぎて、意氣尙ほ豪、山室大佐に至りては、我等に比して、春秋に富み、今が最も人生の油の乘つた時節と存じます。

山室大佐の此行は、尋常一樣の海外旅行ではありませぬ。今回は約一個年英國に在りて、凡有る見學をなし、歸來日本の救世軍を双肩に荷うて、愈よ御奉公を勤め勵む譯であるとと承りました。されば私共が大佐の此行を壯にするは、洵とに所以ある次第であります。恐らくは大佐の歸朝と同時に、日本に於ける救世軍は、總ての點に於て、自治が出で來るであらうと信じます。此れは救世軍の立場から見るも、日本の立場から見るも、將た山室大佐の立場から見るも、何れ

も慶賀に禁へない事であります。

私は未だ大佐からして、救世軍に投ぜられたる由緣を承りませぬ。併し日本に於ける救世軍が、始めに山室大佐を得たるは、實に第一の勝利でありました。而して大佐が救世軍に投ぜられたのも、大佐に取りて、人生の行路の第一成功であつたと思ひます。云はゞ日本の救世軍は、大佐によりて、其の本領を發揮し、山室大佐は、亦た救世軍によりて、其の本領を發揮しました。此れを神の御心でないと、誰か申しませうぞ。

私は宗教に於ては、先づ無籍者であります。救世軍に就ても、深く知る所はありませぬ。惟ふに英國監督教會から、ジョン・ウェスレー出で來りて、メソヂスト教會を創めて以來、百八十五年、そのメソヂスト教會より、ウイルリアム・ブースが、救世軍を創めて以來六十年。斯る時代に、斯る宗教的制度の出で來つたのは、歷史的眼孔からすれば、良とに已むを得ない次第であつたと思ひます。

私は深く、ブース大將夫妻の胸の奥迄、立入りて吟味したのではありませぬ。されど彼等が神學よりも純信に、空想よりも實行に、獨善よりも救濟に、臆病退嬰よりも、破魔の利劍を振り翳して、惡魔の巢窟に躍り入りたるは、必らず彼等が、已むに已まれぬ動機に導かれたものと信じます。或は摩西が雲の柱や、火の柱を見て、アラビヤの荒野を辿り行きたる如く、彼等夫婦も、暗黑の眞中に、天光を見て、驀進したものと思ひます。

私は此の六十年間の救世軍の歷史を眺めて、眞に奇蹟とは、此事であらうと存じます。ウイルリアム・ブースと云ひ、其妻カサリン・ブースと云ひ、彼等は信仰以外に、何物をも持つて居ませなんだ。學問も、財力も、門地も、後援も、殆んど恃む可きものは、何も持ち合はしては居ませなんだ。彼等は神を信ずるのと、己を信ずるのとの外には、無一物でありました。而して彼等は迫害を被りました、それも其筈であります。彼等の態度は、世の諸惡に對して、挑戰的であつ

たからです。佛敎では諸惡莫レ作、衆善奉行と申しますが、彼等は諸惡退治、衆善勵行であります。彼等は惡魔とは、當初から喧嘩腰です、決して妥協的態度ではありませんでした。

然るに此の眇たる二人の男女は、遂に世界を征伏して、救世軍の世界的大帝國を作りました。固より征伏し了つたとは申しませぬ。されど今日救世軍は、世界の凡有る方面に行き渡つて居ります。國から申せば、八十一國であります。其敎を傳ふる言葉は、五十三種の言語があります。此の廣き版圖は、古への羅馬帝國も及びませぬ、又成吉汗の帝國も及びませぬ、今日其の領土に太陽の沒するなしと云はるゝ、ジョージ五世の帝國も及びませぬ。而して斯る大帝國を造り上げて、一人の寡婦や、孤兒を作り出したでもなく、一個の黑點を、歷史に印したでもなく、所謂る破邪顯正の凱歌を奏して、此に至つたのであります。之を奇蹟と申さずして、何と申しませうぞ。

私は救世軍の勃興を以て、對症投藥と申したいのであります。政治上、社會上には佛國革命以降、經濟上、生活上には產業革命以降、物的の不權衡は、又た隨處に靈的の不健全を來たしました。されば此際に、各種各樣の社會改造の意見や、計企も出で來りました。其中にて、救世軍は最も簡單明瞭であります、救世軍は最も八方無礙であります、而して救世軍は最も其の實行性を、多量に持つてゐるものであります。

第一に救世軍は、陽氣である、毫も陰氣でない、暗くない、明くある。時としては貴族趣味の人には、餘りに陽氣であり過ぎはせぬかと、氣遣はるゝ程である。所謂る幸ひなる宗敎の表現であります。凡有る罪惡は、暗處より生じます。然も救世軍は世界の隅々をして、光明あらしめんと心掛けてゐます。

第二に救世軍は、思案、投首的でなく、卽時實行的であります。餘計なる智惠、分別を廻らして、評定に其日を送りつゝある間に、救世軍はどし〳〵其の著手

し得可き點から、著手して行きます。世上の志士仁人の言と行とは、概して非常の距離があります。されど救世軍は、行ひ得可からざるとを言はぬ代りに、言ふことは概して行ひ、且つ行ひ得んと勗めてゐます。

第三に救世軍は、學說に偏せず、哲學に囚はれず、敎理に縛られず、唯だ心靈の救を絕叫する。現ブース大將夫人が、救世軍の目的を語りて、

第一は、男子、婦人、及び子供を罪から救ふ事、

第二は、彼等に他人を救ふの手法を敎習せしむる事、

と申されたのは、如何にも要領を得てゐるものと存じます。

第四は全人類的である。救世軍の眼中には、白人も黃人もない、又た英國も日本もない、固より資本家も、勞働者もなく、有產階級も、無產階級もない。其の敵は、只だ惡である。苟も善に與みする者は、救世軍の友であり、惡に與みする者は、救世軍の敵である。敵と味方の差別は、只だ此の一點であります。されば救世軍の味方には、上は帝王より、下は乞食に至る迄あります。卽ち凡有る境遇の人類を包括してゐます。救世軍の袋は、社會主義者抔の袋よりも、其口は廣く、其底は深くある樣であります。

更らに私の最も共鳴するは、救世軍の戰鬪的態度であります。彼等は決して惡を畏れませぬ。世の中に惡の增長するは、善人が惡を畏るゝからです。然も救世軍は、惡を退治するを、其の職分と考へて居る樣です。何やら社會の大掃除を、一手販賣にしてゐる樣です。賣淫問題、飲酒問題、貧乏問題、其他社會の掃溜の處分は、何れも救世軍の繩張りの中であります。

救世軍は決して靈を救ふのみでは滿足しませぬ。所謂る靈肉一如の救濟であります。此れは故大將ブースの『最暗黑の英國及其出路』の刊行が、詳かに之を語りて居ります。（一八九〇年十一月、明治二十三年）日本に於ける救世軍も此の意味に於て、成功して居ります。救世軍は溺れたる人に向つて、汝は何故に溺れたる

乎と、岸上から叱りつけませぬ。自から手を伸ばして、時には足を投じて、之を引き上るのが、其の本旨かと存じます。一昨年の大震災に於ける、救世軍の活動振りは、實に我等の讃稱に値するものと思ひます。

兎角心靈に重きを措く者は、高蹈派となり易いものです。云はゞ精神的貴族主義に偏する樣の、傾向があります。此れも或は已むを得ませぬが、デモクラシーの世の中には、此れでは普遍的に、宗教の恩澤を及ぼすとが出來ませぬ。然るに救世軍には、劉玄德が其子を戒めたる言葉の如く、惡の小なるを以て爲す勿れ、善の小なるを以て爲さゞる勿れと申す通り、細大となく諸〻の害惡は、悉く退治の條目に入れてあります。而して其の善行は、又た細大となく、顯揚の條目に入れてあります。

世の中に思想善導など丶申す者がありますが、少くとも救世軍が盛なれば、思想は善導せられます。救世軍は現在の社會を、其儘に受取りて、其の弊害を矯正するものでありまして、決して社會其物を、根柢から覆へさんとするものではありませぬ。されば――ース第一世も、――ース第二世も、世界の無產階級の親友である如く、又た凡有る帝王、大統領、又は爲政者の友でありました、又たあります。彼等兩人は、屢ば是等の方々に謁見し、又た其の深厚なる同情に浴して居りました、又た浴して居ります。

日本に於ける、救世軍の今日あるは、半ば以上山室大佐の努力奮鬪に由ると申すは、必らずしも友人たる私の贔屓目ではありますまい。然も山室大佐をして、其の手腕を揮はしめたる、亦た――ース第一世、第二世、最高幹部其他の力と申さねばなりませぬ。

救世軍は日本に入りて三十年になります。今では士官三百人、下士官九百人、兵士一萬人、其の傳道所は全國に百餘あり。其の社會的事業として、結核療養所あり、貧民病院あり、勞働寄宿、及び職業紹介あり、婦人救濟事業あり、釋放者保

護あり。育兒ホーム、其他幾許の社會事業があります。

此の三十年間の成績に就て、記憶す可きは、ブース大將が、八十歳に垂んとする老軀を提げて、明治四十年五月に、我が大日本帝國を見舞はれたことであります。而して我が明治天皇が、救世軍制服の儘にて、謁見を賜はつたことであります。此れは日本に於ける救世軍の歴史に、特筆大書す可き事柄と存じます。而して我が明治天皇陛下に於せられても、破格の御待遇と、恐察し奉ります。

我が明治天皇は、歐洲列國の帝王の或る方々の如く、社交的と申すとは、餘りに御好みであつたとは承りませぬ。されば斯る謁見も、日本の天皇たる天職を御竭し遊ばさると思召ての故で、決して御慰みとか御樂みとか、申す意味ではなかつたとと、恐察致します。ブース大將が、天皇の巍々蕩々たる神嚴の御氣に打たれたるは、申す迄もありませぬ。天皇に於せられても、長き年月に亙りて、多くの外人に謁見を賜ひたる中にて、最も御印象の鮮で、深かつたのは、米國前大統領グラント將軍と、此のブース大將とで在つたではありますまいかと、私は恐察し奉るのであります。

ブース大將が、如何なる程度迄、日本及び日本國民を諒解しました乎。そは私の知る所ではありませぬが、少くとも日本に來りて、其の大體だけは、看取したとと存じます。何れにしても救世軍の日本に於ける成功は、日本を諒解し、日本人と協戮した爲めであります。而して其の成功を完全ならしめんには、其の事業を、日本人の手に一任するを先務と存じます。

日本に最初に基督教を傳へたのは、聖徒撒美恵であります。彼は如何にも聖徒でありまして、今尚ほ愛慕に勝へません。彼は能く日本人を諒解しました。

彼等は驚く可く矜重である。彼等は何物よりも體面を重んず。

此れは破的の眼識であります。日本人は古も今も、全く其の通りであります。

然るに撒美恵に次いで、續々と日本に來りたる諸宣教師は、寧ろ日本人を恐れ、

且つ憚りて、彼等を差別待遇いたしました。詳に言へば、彼等に飜譯せしめ、或は事務を取らしめ、傳道せしめ、説教せしめましたが、其の幹部には加へなかつた。卽ち彼等を使用人として使用して、仲間として協議しなかつた。此れが天文より慶長元和に至る間、日本の耶蘇教傳道が、其の理想的の進歩を見る能はなかつた理由の、總てゞないとするも、重なる一であつたと存じます。

此の傾向は、恐らくは明治の初期から中期迄も、我が諸外國宣教師間にも、行はれたらしく思はれます。然も今や何れの基督教派も、絶對的とまでは行きません としても、概ね此の差別待遇が、撤廢せられた樣であります。此れは經驗の教訓を受用したるものとして、至極尤のことであります。

救世軍は一方には、嚴格なる軍制を應用してゐますが、他方には、四海兄弟の旨義を實行してゐますものとして、斯る心配は毫もありますまい。特に山室大佐の如き、信仰から云ふも、熱信から云ふも、年功から云ふも、勉强から云ふも、固より其の八面十六臂、凡有る藝當をなして、一身を救世軍に捧げたる、人物である以上。君の兩肩に、日本の救世軍の經營が負擔せらる可きは、必然の歸結であり、又た當然の成行であると、申さねばなりませぬ。

我が日本帝國は、世界の長を受け納れて、何等吝なる所はありませぬ。ブース大將の明治天皇に拜謁したるは、事實に於て、日本が救世軍を、多くの宗教團體の一として、受取つたる象徴と申すも、決して過言ではありますまい。

私は決して國自慢をするではない、然も日本の如く、世界の善と美とを攝取するに於て、無我にして寛大なる國は、何處に其の比例を見出すとが出來ませう乎。若し救世軍が、日本の建國の根本義に恭順し、其の治化を裨補するに於ては、其の今後に於ける隆昌は、固より私が保證する迄もないとであります。而して其の當面の責任者として、親友山室軍平君を見出すとは、三十六年來の舊友として、私に取りて如何ばかりか愉快でありませう。

但だ私は最後に一言申上げたきことがあります。人間は其の地位が進むに從ひ、責任感が多くなります、責任感が多くなるに從ひ、臆病になります。別言すれば、戰鬪的精神が衰へて參ります。併し救世軍の本領は、戰鬪であります。救世軍が若し之を失ひますれば、鹽其味を失ふものであります。私は山室大佐が、決して初心を失墜するとは申ませぬ。併し萬死を冒して、自由廢業運動を做した當初の精神を、何時迄も御記憶ある樣に願ひます。人間は、初心を失はぬことが、何寄りの寶と存じます。

滿堂の各位、別段面白くない長談義を靜聽せられたのを、感謝致します。茲に恭しく山室君の一路平安を祈ります。（大正十四年六月廿四日の夜　青山會館に於て）

大谷伯爵夫人を弔す

若し日本女性の特質なかりせば、日本歷史光輝の一半は、減殺せられたるならむ。吾人は克く赫々の功を讃するも、動もすれば冥々の力を看過することなきにあらず。惟ふに帝國運命の幾分は、否な其の大なる部分は、恐らくは帝國婦人の支持する所と云ふも、過言にあらじ。頃ろ三十歲の紅顏妙齡を一期として、空しく白骨に化したる大谷伯爵夫人の如きも、蓋し日本婦人の典型たるに庶幾からむ。日本婦人の貞淑なる事、其の思ひやりの深き事、恭謙なる事の如きは、世界遍遊の外客さへも、容易に之を看取するに難しとせず。されど日本婦人の特質は、果して此の如き乎。果して此に止まる乎。是れ吾人が我が姉妹に對する、公平の爲めに、最も研究を要する一たらずんばあらず。蓋し露の乾ぬ間の朝顏に、無常を感じ、松梢を渡る小夜嵐に、幽魂を驚かし。春花秋月、一として物の怜れを覺

えざるなきが如きは、是れ唯だ日本婦人の優美なる一面のみ。

日本婦人は泣蟲にあらず、彼等の意志は、其の涙珠を嚥下するに餘りあり。但だ彼等の意志や、我慢にあらず、彼等の意志は、虚榮心の膨脹にあらず、出來心の放恣にあらず。其の山をも動かす意志は、恒に犧牲的精神の動力となりつゝある の一事こそ、其の特質なれ。世界を見渡せば、婦人必らずしも、意志の薄弱なるものにあらず。然も多少の意力ある者は、多少の我儘なきはなく。卽ち偉大なる意志を有する婦人は、偉大なる我儘者たらざるもの少し。日本婦人とても、必ずしも全く此例なしと云ふ可からず。然も其の大體に就て見れば、其の意志は、我儘を遂ぐる爲めに使用せられずして、寧ろ我儘を殺す爲めに使用せらる。吾人が特色と云ふは、兩者の化學的抱合是れ也。古此の如く、今尙此の如し。

我が大谷伯爵夫人の如きも、蓋し其の標本の一ならん。夫人は實に英照皇太后を伯母とし、皇太子妃殿下を妹とし、其の血管には、天步最も艱難なりし時代に於て、賢宰相たる關白兼實の血の流れたる女性也。彼女は其の生家たる九條家を辱しめざるのみならず、其の歸嫁したる大谷家に相應し、特に其の夫婿たる大谷伯爵とは、一切の性行、趣味、嗜好に於て、好個の夫婦たりき。

彼女は日本貴族の婦人として、富士登山者の重なる一人なりき。三十七八年役に際して、自から綿衣を著け、全國同門の婦人を奬勵して、寧處に暇あらざりしは、言ふも更なり。或は夫婿と與に、樺太の原野に天幕生活をなし。或は支那中原の旅行に、終日馬背に坐し。或は印度の古跡探討に、或は歐洲名都の巡遊に。凡そ夫婿の在る所、必ず在らざるなく、行く所必ず行かざるなし。其の安逸の如きは夢想だも及ばざりしならむ。

大谷伯爵は、假りに本願寺法主たらざるも、日本現代に於ける有爲の貴族の一に數へらる。其の志は一身の獨善にあらずして、天下の兼濟に存するは、何人も少しく伯爵の平生を知るものは、之を認識せざるはなし。而して夫人は伯爵に取り

て、單に家庭の佳伴侶たりしのみならず、恐らくは其の好知己たりしならむ。記者は未だ本願寺の內部の歷史を詳にせず、然も伯爵夫婦の如き、理想的家庭の果して存在したるや否やに就ては、未だ之を知らず。其の門末の衆徒が、夫人に向つて隨喜したるも、決して偶然と云ふ可からず。今や其人逝く、嗚呼悲哉浮生夢の如し、未だ萬歲の人身を受けたりと云ふ事を聞かず。一生過ぎ易し、今に至りて、誰か百年の形體を保つ可きや。朝には紅顏ありて、夕には白骨となる。吾人豈に此際に於て、徒らに人生の果敢なきを嘆ぜんや。但だ我が大谷伯爵夫人の如き、記者の親しく知り得たる範圍に於ても。其の三十歲の生活は、極めて短かりしに拘らず、其の淸淨にして、且つ有益なる生活たりしことを、明言するを憚からず。而して其の己に接し、人を待ち、下を使ひ、上に事ふるに於て、日本婦人のあらゆる美點、就中堅忍なる意志を以て、犧牲的精神を發揮したることを特筆し、玆に聊か追悼の意を寓す。

昨年の末、記者大谷伯爵を、六甲山腹の二樂莊に訪ひ、伯爵の案內にて、莊內各室を縱覽し、遂に夫人の書齋に及べり。淸素なる一室、和洋の書籍、書架に堆く、卓上には英字書あり。記者は竊かに夫人好學の甚だ欽す可きを思へり。而して今や其人亡し、懷うて伯爵の心情に至れば、寧ろ緘默の外なきのみ。

（明治四十四年一月廿九日）

古の日本婦人の典型

頃ろ友人阪井德太郎君、『殊法大姉行狀』を寄せらる。此れは三井男爵家祖先の主婦にて、本年本月が二百五十年回と云ふ。蓋し彼女も亦た三百年前に於ける、一個の女丈夫であり、典型的主婦であり、又た稀有なる日本婦人であつた。

國艱にして良相を思ひ、家貧にして良妻を懷ふと云ふが、良妻は必らずしも貧家のみに必要でない。苟も人間の仕事に、女性の關涉なきものはない。事件の裡面

に婦人ありとは、惡しき意味にも、善き意味にも、間違なき言葉だ。

三井男爵家は――其の祖先は兎も角も――中宗は江州の佐々木家に屬した。天正年中、三井越後守流落して伊勢松坂に至り、其子高俊に至りて、始めて酒屋となる。殊法大姉は、高俊の夫人、伊勢の豪家永井氏の女だ。

高俊は武士の家に成長し、固より算勘も疎であつたが、其の夫人殊法が、內助の功によりて、以て今日の三井家の基を創め、且つ築いた。此に至りて、記者は三菱の基礎が、亦た同じく女性に出でたるとを、聯想するを禁じ能はぬ。岩崎東山、及び彌之助兄弟をして、其の家を興さしめたるは、其の母の力と云ふとは、誰しも知る所。一は母であり、一は妻である。然も兩家が女性に負ふ所は、均しく一と云はねばならぬ。

記者は曾て三井高房の『町人考見錄』を讀んで、保家修身の道に於て、其の考察の精詳、審密なるを見、三井家の三百年來存在する所以の、偶然でないを知つた。

考見錄は、町人盛衰鑑とも云ふ可きもの、悉く實例を擧げて、其の敎訓を示してゐる。

殊法の人物は、左の通りだ。

若き時分より、天性商心、始末、費をいとひ、古今めづらしき女人にて候。殊法四十餘にて、夫死去被レ致、後家にて大勢の子供をもり立、商賣油斷なく、相勤られ候。質物など外よりは利分も少々安く致し、かすを取候樣に被レ致候。又酒、味噌など買人どもあしらい、自身それ〳〵に茶、たばこ、冷飯等にても、買人の使の者にあいそう致レ被候。（商賣記）

とある。而して如何に彼女が、信仰家であつたかは、

年四十より內々常精進に成申され候。尤八十七歲にて死去す、慈悲心深き人にて、佛神信仰つよく、常精進已後、每日寒中にも、朝七つ（今日の午前四時）には起、水をあび、夫より神佛祈り被レ申候。

尙ほ彼女の儉約に就ては、

始末の儀は、寺參りなどの節、道にて馬沓、古わらんづ、古繩等落在レ之候へば、供の下女に拾はせ、近き所の存知候方へ、すさ藁に致候樣にと、ほり込通り申され候。算用の儀、何程大分の儀にても、中々くくりにて、算者の及申儀には無レ之候事。

而して其の廢物利用の妙に至りては、更らに左の一項を見よ。

常に何にても、捨申され候もの無レ之、女の元結先きをも拾はせ置、くわんせこよりに被レ致候。半紙の隔わら、最も取置、油上げ物のへだてに致され候。摺鉢の底のぬけ候をば、則とゆの受筒に致され候。水柄杓の底ぬけ候をば、煎茶壺の尻敷に致され候。

今日の新らしき婦人、若しくは女學生上りの新主婦などは、之を一讀して如何の感をなす。（大正十四年九月十二日）

屑屋の籠

（其一）矢島楫、鹿山の兩和尙

大正十四年八月初九、今日は日曜だ。朝課を了りて、新聞を讀む。立秋後一日、曝書に取りては、無二の好天氣。

成簀堂文庫の架上に、打ち籠んだる古筒を發けば、所謂る屑屋の籠も同樣、種々雜多の物、現はれ來る。中には記憶したる物もあれば、忘却したる物もある。今ま何等の選擇をせず、手に任せて、其の二三を採錄す。

雪きえぬ山田の小屋の朝まだき日影まつ間に咲やこの花

と二枚の短冊の裡に、上半下半を分書し、其表には、『惡に敵する勿れ』又た『喜ぶ者と共に歡び、悲しむ者と共にかなしむべし』『大正九年之夏、八十八婆楫書』とある。而して別にまた數枚の短冊があるが、其の一の裡面に、予自から『大正

九年十一月念一、矢島老夫人を赤坂矯風會事務所に訪うて携へ還る」と記してゐる。筆跡は如何にも雄渾にして、奔放。とても八十八歳の老婆の手痕とは思へない。

又た卷紙に、

蘇峰、無佛二居士見訪山房、座間賦呈

疎鐘隱隱隔レ山聞。　倦鳥還レ林日欲レ曛。
一抱茅庵纔容レ膝。　半分居士一半分レ雲。

是　正　　洪岳未定

とある。此れは何時の頃にや。阿部無佛居士と與に、宗演老漢を、鎌倉山の内なる東慶寺に訪うた際、貽られたものだ。曾て予が宗演老漢と記したるとに就て、世上では異議の人あつたが。老漢の老師と擇ぶなき敬語であることは、少しく禪籍を讀んだ人は、皆な知る。

又た他の卷紙の一片に、

退院拙偈

三鼓聲中辭二瑞峰一。　烏藤直入紫嵐濃。
白雲鎖斷西谿路。　倦翮棲レ林不レ見蹤。

慈　政

とありて、署名はないが、此れは宮路宗海和尚の作であることは、其の筆跡にて、直ちに判知せらる。

宗演、宗海兩師は、近時關東に於ける、臨濟界の代表的人物で、與に相ひ前後して、圓覺寺の管長となつた。記者は兩師とも、親交を忝くしたが、其の家風は、自から相ひ殊りて、一方を李將軍とせば、他方を程不識とし。一方を文晁の青綠山水とせば、他方を大雅堂の淡墨山水と云ふが如く、實に面白き對照であつた。

（其二）金雲養、李一堂、明石柏蔭

筒中には、朝鮮物が少からずあつた。其の一に曰く、

伊人宛在水之東。　鴻雁影疎犀自通。
筆記則春生秋殺。　襟懷似朗月清風。
十年不見情何極。　萬事欲忘酒有功。
聞道藜燈方述史。　可能一讀快澆胸。

蘇峰先生粲政　　八十六叟　雲養　金允植

此れは半切に、行書にてしたゝめてある。記者が修史の事を傳聞して、贈り來つたもの。固より敢て自から當らざるも、流石に大家の作として敬服する。記者は雲養老人が、酒に功有りと云ふも、果して然るや否やを知らず。但だ內地製のカステーラが好物たるを知り、大正十年四月、老人を京城鳳翼洞に訪うた際は、之を携へ呈した。而してそれが最後の會見であつた。

又た尺餘の絖片に、

時局の問題發展につき、歌よみてよと、人の請ひければ　　有朋

大君の惠の露やかゝるらむ高麗の廣野の民草の上に

とある。此れは山縣元帥が、日韓併合の際、詠じたるものであらう。

又た子爵趙重應君の、長文の書翰などある。餘りに長文なれば、割愛する。其の同封中に、侯爵李完用君が、絹本に大書したる『國朝謀略無双士。翰苑文章第一家』の聯句がある。兩句の一字でも、記者の甘じて受くる所でない。併し筆跡は實に見事だ。雲養（金）の書は、老勁にして氣骨あり、一堂（李）の書は、媚嫵にして秀色饒し。

尙ほ明石大將の達磨や、詩や、若干ある。其の詩の一に曰く、

漢城昨見兩三葩。　微雨夜來春頓加。
小酌春深庭外樹。　先生到處自開花。

元未定稿

とある。此れは記者の『一年兩度看二櫻花一』の作に次韻したるもの、半切に、黃山谷流の楷書。詩は左程でないが、字は頗る上出來と思ふ。

明石將軍は、一見朴訥、木强漢に似たが、其の才藝、向ふ所、可ならざるはなかつた。武人にして風雅の士、山縣元帥は、姑らく論外として、乃木大將、一戸大將、明石柏蔭、立花蜻州の如き、屈指であらう。殊に大島蘇谷に至りては、玄人も跣足で逃げ出す腕前がある。尙ほ其外にも其人あるであらう。

（其三）　海舟翁、桂公、寺內伯

自分でさへも意外である、色々のものが出で來る。屑屋の籠たる名目空しからずや。

大なる封筒の中から、勝海舟翁の八つ切型の寫眞が現はれた。其の裏面には、翁の眞筆にて、

題自像

爲レ將爲レ半。　忽浮忽沈。　驚レ天動レ地。　廊落胸襟。

明治廿九年　月　　勝安芳

送二于蘇峰德富氏歐米行一

とある。予は何故に此の寫眞を、笥底に仕舞置きたる乎。そは別により大なる肖像の額面を、翁より請ひ受て、之を楣間に揭げてゐたからであらう。

又た故き狀袋の中より、二板の半紙に桂公の手筆が現はれた。

日英同盟協約案の原稿、葉山桂子爵邸に、協議の爲め、當時の伊藤侯爵、金澤別邸より來られ、侯爵子爵協約案を議し了り、子爵は別邸の命名を侯に乞。侯

之を諾し、長雲閣と命じ、卽ち長雲閣の額を書し、併せて此詩を作る也。

明治三十四年八月四日於長雲閣卽吟

紛紛世事亂如絲。　大海看來似小池。

相國豈無閑日月。　不談兵務只談詩。

日英同盟締結の當時、桂內閣は、伊藤公を出し拔いたとの、世評もあつたから、桂公は故らに當時の眞相を明かにす可く、斯く記錄したのであらう。長雲閣の額は、兩政治家の沒後迄、葉山桂別邸に存してゐた。今は如何であらう、予之を知らず。

又た『寺內總督揮毫、四四の八の廿九夕』と外題したる封筒の中より、卷紙を竪一行に認めたる、

雷りが止みて晴行月凉し

一週年の日　魯庵

の文字が現はれた。此れは寺內總督が、日韓併合一周年に際し、東京の自邸に小集を催した時、書して記者に與へたもの。

雷と云ふ綽號は、世間に其類多し。今日では仙石鐵相の如きも、世間から、雷大臣の佳號を賜はりつゝある。過去では雷と云へば、內田山の大雷——井上世外侯——又た朝鮮京城南山倭城臺の小雷——寺內魯庵——の如き、其の尤も有名のものであつた。此の大雷小雷、何處やら似通うた性格もあつたらしい。

（其四）重野、竹添兩翁、及び其他

封筒に亡兒萬熊の筆にて、『重野成齋先生筆跡』と題し、其中より奉書紙に認めたる、

哭　楳塘　本田翁

屈指舊交君獨存。　湘鄉棲隱樂殘年。

（其五）紅葉、美妙、鷗外

筒の底からは、彌よ種々の物が出で來る。何やら一纏めにくゝりある紙袋を發けば、その中よりは、故手紙が山程―無論形容詞―ある。今ま手に任せて、其の若干を抽出せんに、

東京赤坂氷川町五番地　徳富猪一郎様　尾崎紅葉

と葉書の表に書し、

新年の御慶目出度申納候、なほ筆硯の愈〳〵御多祥ならむ事を祈る。

一日

とある。別に珍らしきこともないが、但だ代筆でなく、印刷でなく、紅葉の眞筆その儘を悅ぶ。郵便の消印には、『廿五年一月一日ニ便』とある。

紅葉と云へば、曾て其の對照者であつた山田美妙を聯想する。意外にも、美妙の手紙は、澤山ある。其の中から、封筒の表には『國民新聞社徳富猪一郎様　山田武太郎』と書し、更らに朱筆もて小字にて『徳富氏御不在ならば、會計掛に於て、開封些しも苦しからず候』とあり、裏には『十一月十九日』とある。

拜啓〔前略〕

一　原稿料は、御手數ながら封入をなし下され度、而して封袋には、金子入と御記載これなきやう願上候。〔後略〕

此のこれなきの四字に圜點を附したるなど、美妙其人を見るの想がある。

表面には『京橋區日吉町四番地　民友社徳富蘇峰様　梧下』と記し、裏面には、『千駄木町五十七番地　森林太郎』とある。

御書狀拜見仕候。御引立と申し、わざ〳〵兩度までの御申こしなれば、是非共とは存じ候へども、いままでの講者も講者也、なにか說法めきて、自然人の氣に障り可申歟とひかへ申候。その代り少々思付きもこれあり、遠からぬ中に、何か文學會へ持出し可申候に付、それまで御待願上候。

二十一日

蘇峰先生梧下　林太郎

而して郵便の消印には『武藏東京本郷廿三年十月三十日ロ便』とある。記者は何等に就て、鷗外博士に依囑したかを記憶しない。然も何か文學論でも、注文したのであらう。鷗外博士の書は、實に見事のものである。淡墨にて半紙一枚に殆んど餘白なく、揮洒してゐる。

〔其六〕甕谷先生、萩の舍主人

表面に『京橋區國民新聞社　德富猪一郎殿　親展』裏面に『有樂町一ノ五　岡松甕谷』

先日は色々御配慮被下候より、存之外盛會に相成、且久々に得拜晤、老懷不堪欣幸之至候。此後も尙幹理を相願候。御多忙之中、恐縮には候得共、猶又可然御嘶合被下度所希候。御目に懸御禮可申述候得共、不取敢一匆々布字候。不宣。

甕谷

德富賢臺

十一月十八日

而して消印には『武藏東京廿三年十一月十八日ル便』とある。此れは舊紹成書院の門生共が、院主岡松先生の爲めに、祝宴を催した際の書簡であらう。予が先生の門にある、才かに半歲に滿たず。而して先生の講席に出でたる、數回に止まる。云はゞ名のみの門人であつた。然も先生の學術、文章には、今尙ほ尊敬を拂ふ者。悔らくは誨を聽くとの、淺かりしとを。

表面『民友社　德富猪一郎殿　文學史添』裏面『十月廿七日　落合直文』

愈〻御安康賀上候。さてかねて御噂被下候かの三上高津兩氏の文學史出版出來致候。小生もいさゝか關係ありしを以て、特に小生より、御とどけ申

上吳候樣とのことなれば、呈上致候。猶國民新聞、國民之友などにも、御披露被下候はゞ幸甚。

落合直文

徳富猪一郎殿

御史

國民新聞も、久々の御災難、さぞ御不平の事と恐察致居候。

國民之友の原稿は、病氣にて、充分認候事不叶、はじめの方、少々御屆申上たる筈也。

此れは郵便でないから、何年と云ふとが分らない。國民新聞の災難とあるは、發行停止の事だ。當時陸羯南君等の日本新聞と、我が國民新聞が、發行停止を被る兩横綱であつた。但だ當時の國民新聞は、編輯のみにて、印刷は他所に依賴したれば、其の災厄も、左程ではなかつた。然も何日に解停になるかゞ、不分明であつたから、それには餘程閉口した。

〔其七〕　島田沼南、中江兆民

偶然にも反故の中から、島田三郎君の手簡に遭著した。封筒の表面には、『日吉町國民新聞社　徳富猪一郎樣　親展　中六番町三十一番地　島田三郎』とあり。裏面には、二錢の切手が二枚張りてある、〔當時は葉書一錢、郵信二錢であつた〕此にて其の長文であるとが判知る。而して郵便消印には、『武藏東京麴町廿三年八月二十八日チ便』とある。

此れは議會開設以前、故河島醇氏を首として、九州の進歩主義者が、全國の自由黨、改進黨を大合同し、茲に民黨の一大結束をなし、以て政府に當らんとしたる際であつた。當時島田君は、熱心なる合同賛成者であつた。記者は今尚ほ當時に於ける島田君の行動を、推稱するに吝かでない。而も改進黨中に異論を生じ、島田君は、背後に敵を受け、頗る困窮の地に陷つた。此の手簡は則ち當時のもの。

九月一日の大會「改進黨の」には、解散「解黨」論よりは、却て維持說多からんと存候。……此れは分離して新政黨に加はるよりは、新政黨と相合ひヅク迄、舊態を守ると申す說に御座候。サレバ今後と雖、自由黨之一方にて、眞成に合同を求めば、改進黨を擧つて、合同するに至るべし。尤小生は獨立の決心に候へば、大會にも出ざる積に御座候。

以上は其中の一節だ。島田君は本來黨人ではなかつた。何時でも獨立の決心があつた。此れが彼をして政黨政治家として、成功せしむる能はざる、一の弱點であつた。併し彼が淸士として、或る一部の人士より尊信せられたるも、亦た此れが爲めであらう。

別に中江篤介君の書簡がある。表面『日吉町國民新聞社　德富猪一郎樣』裏面『十月七日小石川柳町二十九番地　兆民生』郵便消印は、『武藏東京小石川廿三年十月七日ホ便』とある。

拜啓。改進黨合同一件は、一時絕望之姿に相成居候處、何分初一念難レ棄事に有レ之、近日高田（露）宗像（政）諸氏も種々心配盡力、小生事も、右に一臂の力を添、今の幹事常議員の一二名と協謀中に有レ之、多分好結果を可レ得と存居申候。然に御承知之通、立憲黨之中も、猶尙異分子有レ之、此事何分密々計畫を要する事に有レ之、依て御社にも、若し探訪者より、何か探り來候事有レ之候ても、一切御記載無レ之樣願度、此段唯漠然と、御社員へ御命じ置き被レ下候樣奉レ願候。陰險家の離間策を恐るゝ故也、書不レ盡レ意拜。

十月七日

德富君　　中江

左右

此れも前文と關係がある、矢張り進步主義者大合同の餘波である。流石に兆民君だけありて、短文の中にも、極めて要領を得てゐる。

〔其八〕原田直次郎君

今日では原田直次郎君の名を記憶する者は多くあるまい。君は故原田一道男爵の二男坊で、獨逸に赴き、繪畫を修業した。其の大作の龍頭に乘りたる觀世音の如きは、二十三年の大博覽會に於ける、驚異の一であつた。家淇水翁や、横井小楠先生やの肖像は、皆な君が描いたるもの。記者は今も其の小品數點を愛藏してゐる。

表面『京橋區日吉町國民新聞社にて　德富猪一郎様　至急用』裏面『八月廿四日原田直次郎』而して郵便消印には『武藏東京本郷廿四年八月二十四日ホ便』とある。

拜啓不順之候、益御清榮大賀此事に御座候。陳ば過日東京新報の朝比奈氏『壯士の行爲に付き、益す筆誅を加へんとす』と本月十六日の新報に論ぜられ候事に付、ポンチ畫一葉、遲ればせながら進呈仕候。若し御望も有レ之候はゞ、御社新紙へ御載せ被レ下度希望候也。先は右迄草々頓首。

八月廿四日　直次郎百拜

德富様　御史

二伸　此畫の文句は、如何樣になりとも宜敷樣、御記入被ニ相成一度奉レ願候。而して其の封筒中に、薄葉に、烏帽子直垂の朝比奈が筆を矢にして、草紙〔壯士〕を的に射る圖がある。而して並べたる草紙には、それぞれの姓が書いてある。何れも當時世の中を騷したる壯士等の姓らしく思はる。此れは其儘沒書にしたものらしい。記者も只今其の封筒中を改むるまでは、斯るものが在中とは氣付かなかつた。

原田君は、故森鷗外博士と、親友であつた。恐らくは獨逸留學中からのことであらう。君は後に脊髓病に罹り、多年仰臥しながら、尙ほ時に小板、片布に、畫く

ところのものがあつた。美術家としては、其の弱點缺點を拔きにしたる人格者らしく見受けられた。

〔其九〕安場翁と家翁

封筒の表面『德富猪一郎殿　紙包もの添』裏面『安場保和』とある。其の中より二通出で來る。一通は安場翁、一通は家淇水翁の書だ。此中より家翁の書を見出すは、全く意外であつた。

安場氏託、一筆申進候。時下壯健日夜精勵之段珍重。此元老壯幼皆々壯健安心可レ給候。臨時會〔廣島に於ける戰時臨時議會〕も、素論の通、其地え開設、就ては別而夫是繁多察入申候。社運之儀は、定て諸子より可レ被二申越一。此氣候にてばゞ〔著者の母久子刀自〕も彌以元氣能。子供は尙更日々昇棱。萬熊なか〳〵知惠付、見替たるものに相成候。

安場氏十日比には、尙荷物等持參、諸生御地へ參候との事にて、其節に衣類之一二枚は、賴候て宜との事に付、不自由の品は可レ被二申越一候。

藤島も此夕歸候由、先日の網打にて、矢張痔に申分有レ之候へ共、一兩日中には、此元迄位は參可レ申と申遣候。何も此段迄、草々申縮候也。

九月廿六日〔明治二十七年〕　一　敬

猪一郎殿

追て熊本より到來候間、乍二小箱一さし遣候也。

當時記者は、大本營の進轉に隨うて、廣島に在つた。安場男爵は、多分貴族院議員として、廣島に於ける、臨時議會に出席す可く來たものであらう。家翁と安場翁とは、同しく横井小楠門下であれば、其の莫逆の交であつたことは云ふ迄もない。

萬熊が智惠つきたるとあるが、同人は明治二十五年壬辰十一月十五日の生なれば、當時は足掛三年、滿二歳には尙ほ二個月弱不足した。藤島とあるは、予が從兄藤

島正健君のこと。今や書中の人、安場翁、予が父母、藤島君、萬熊、悉く不歸の客となり、現世に呼吸する者、只だ記者一人のみ。熊本到來の小箱とあるは、恐らくは朝鮮飴であらう。

〔其十〕江藤新作君

『東京々橋區日吉町國民新聞社にて　德富猪一郎樣　急親展』『肥前佐賀　江藤新作』郵便消印二個。其の到著の消印は『武藏東京廿八年六月二十八日ル便』とある。

梅雨の候に御座候處、愈〳〵御清穆奉レ賀候。近來中央之政論、新聞紙上にて、略承知仕候。責任問題も、時機尙早之樣被ニ相感一候。

以下滔々大議論をなし、其終りに、

戰爭に於ては、軍人を賞し、外交に於て政府を責むるとは云へ、田舍の父老は、中々〳〵彼樣な區別は付かず。政府の失策を攻擊すれば、其子弟の功名にも瑕がつく樣相感じ候間。今日の時に當りて、責任問題を唱道して、輿論を動かすと云ふ事は六ヶ敷事。寧ろ時機を誤りたるものと存候。

故に政府攻擊は、今日にては新聞にて論ずる位に止め、今少し程を見計ひて、二三ヶ月の後に運動する方可レ然歟と存候。鄙見如レ此、高見如何。

江藤新作君は、其父江藤新平程の精悍と、快辯と、辣腕との持主ではなかつたが、然も立派なる名門の志士であつた。彼は尙ほ後段に、

次に御承知の通り、先年出版仕候南白遺稿〔江藤新平遺稿〕は、博文館に板權賣渡候處、右板權買戻度、無論前賣渡代金は返戻可レ致候間、乍ニ御面倒一博文館主人に御照會被レ下間敷哉、奉レ願候。右出來候はゞ、更に校正之上、後篇と共に、出板可レ仕積に御座候間、此段御依賴仕候。

如何にも其の先人の志を、紹成せんとする心事が、言外に察せらるゝ。

迂生昨年〔明治二十七年〕廣島にて、インフルエンザに襲擊せられし以來、健

康甚だ惡敷候處、近來較や回復仕、自分獨り賀候、呵々。

右御依賴旁々草々頓首。

六月廿五日　霖雨霏々の朝　新作

德富賢臺

佐賀は從來人物の淵藪と稱せられた。然も江藤新作君を喪うたのは、決して尋常一樣の損失ではなかつたであらう。

〔其十一〕　古澤介堂

日本の新聞記者に古澤滋君の在つたことを、記憶する者は、今日では多くある筈い。併し君は明治七八年以降、十五六年迄、確かに有力なる論說記者であつた。明治七年板垣伯等の民選議院開設の建白書が、君の手に成つたとは、當時に於て、周知の事であつた。

君は恐る可き筆を持てゐた。その筆尖には、ヅール蠻人の槍先の如く、毒が塗つてあつた。何物でも、何人でも、此の筆尖に觸るゝものは、傷手を負はぬものはなかつた。それが明治二十年以降は、最も熱烈なる帝國主義者となつた。

君は井上門下の士。曾て世外侯より、島田三郎君著『開國始末』序文の代作を命ぜられたるに際し、色を正くし、井伊直弼は、逆賊とも云ふ可き者。その爲めには、如何に貴命でも、御免を蒙るとて、理つたと云ふ噂を聞いた。此れは多分代作が面倒だから、然か云うたのであらうと思うてゐたが、後に君と井伊問題に就て語るに際し、其の赤心より出でたる言葉であつたとを知つた。

先達ては櫻田斬姦の眞相、早速御掲載、殊に第一頁御割愛被レ下、千萬感謝之至に御座候。小生は昨年以來、安政四五年間の事蹟を取調、繼嗣問題と神奈川條約始末等取調、今尚取調中に御座候處、調れば調ぶる程、正論派は益々光輝あるものと相成り、之に反し、井伊は惟島田三郎の筆、大隈伯の法螺にて、虛構せられたる者と相成り、條約の事抔は、彼は殆んど沒關涉の證據歷然と相

成り申候。彼はお家の騷動の惡形なりし而已。是れ小生の斷案に御座候。
早晩御清暇の節、猶委敷申上度と奉レ存候。滋又拜。

ツルースとフハクトとの爭に候はゞ、百大隈千島田が來り候とも、決して氣遣は無レ之候。

以上は古澤君が、明治四十三年四月廿六日附の、書翰の追伸である。此にて如何に君が、井伊大老に對して、義憤を蓄へたかゞ知らるゝ。

古澤君は決して世の中を、甘く游泳するを以て、能事とは爲さなかつた。君は恒に一個の主義と、定見とを持てゐた。如何に君の缺點を割引きするも、此れは確かだ。

〔前略〕餘の嬉さに去七日夜は、小生も兒女十人引連れ、丸の内に、提燈行列を見物に參り、同夜混雜の爲め、漸く十一時半過に歸宅仕候。此の混雜も畢竟滿都狂喜の所レ致、死傷者の不幸は可レ憐、又た其筋の不注意も、多少可レ議もの可レ有レ之候得共、兎も角も其の盛況は、海外出征軍人の心にも感ず可く、各社の發起者にも、御滿足之儀と存候。

此れは明治三十七年五月十一日附の書簡の一節である。卽ち當時世間を騷がした提燈行列の一件だ。前には憲兵や警官が、騎馬にて馬場先門を固め、後よりは群集が十重、二十重、百重、千重、潮の如く押寄せ來る。本文の記者の如きはその眞中なる、馬場先橋の中間にありて、殆んど煎餅の如く、押し潰されんとした。否な其の左右前後には、壓死やら、踏み倒さるゝやらの、慘狀を目擊した。伊藤公の哈拉賓の變後、其の葬送に際し、井上侯は誄辭の起草を、古澤君と予とに托した。何れが起草したるやを記憶せざるも、協同責任であつた。所謂る小言幸兵衛的の世外侯、中々納らず。彼是苦情多くて、兩人に向つて、それ〴〵添刪す可き點を要望した。

斯くて兩人協議して曰く、とても世外侯には、文章など分る可き筋でなければ、

一々其の注文に應ず可くもあらず。されば御互が善き樣に取り計ふ可しと、それぞれ修正し、更らに翌朝、之を世外侯に示した所。侯は之を一讀し、君等は少しも儂が申分を立て呉れないと、更らに大小言を喰つた。實は翌朝になれば世外侯は、注文の點を、忘却するであらうと思うてゐたが、中々以て左樣でなく、逐一昨日の注文を繰り返した。然もそれが無理な注文であつたとは、勿論だ。兩人相顏みて苦笑し、兎も角も始末をつけた。

〔其十二〕　長岡雲海子爵

世の中に、華族らしき華族の一人は、故長岡雲海子爵であらう。子爵は維新前には、成山公子として、頗る評判高き貴公子であつた。其の喜連川家に養子に赴き、單身養家を逃げ出したる顚末の如きは、一寸小說らしき興味がある。

雲海子爵は、華冑界にて、將來大宰相の器として、指稱せられたる一人であつた。其の期待は不幸にして、實現しなかつたが、然も華族中の名物男として、何人からも愛好せられた。

子爵は蚤に英國に赴き、バリストルとなつた。其の同學には星亨などが居た。併し其の長所は、法律でなく、漢詩であつた。若し日支親善の功を、個人に求めば、子爵の如きは、其の重なる一人であらう。

子爵は其の氣分からして、何となく支那的に呑氣であつた。自から招待せられたことを、忘却するのみならず、他人を招待して、自から忘却するが如きは、決して珍らしきことではなかつた。

子爵の支那に遊ぶや、張之洞、劉坤一の諸名流、何れも屐を倒にして相邀へた。張之洞は、隨分小六ケ敷爺であつた。併し子爵には全くまゐつた。彼は心から子爵に傾倒し、其の愛孫を托せんとするに到つた。然も是れ一に子爵の天眞爛漫の、然らしむる所であつた。

一昨夕笠雲上人を招き　候節の三律入二貴覽一候間、御一讀の上、槐南先生へ御

示可レ被レ下候。昨日は片瀬へ參り、伊藤侯、曾禰氏等と、秋月古香氏の碑前にて臂をとり、歸京前風琴閣にて、曾禰氏之饗應に預り、伊藤侯の詩不レ熟、小生も詩不レ成、歸途賦二一絶一、本日之を曾禰氏に贈れり。盛況御察可レ被レ下候。扨來月上旬、伊藤侯を葉山に招き候ことになり候。就ては御尊父にも御來游相願度、御相談致度件々有レ之候間、明後日乃ち廿八日十時頃、華族會館へ御出會可レ被レ下候。

長岡　德富雅兄

書簡中には月日なけれども、封筒の郵便消印には、『三十八年六月二十六日』とある。封中の詩七律三首あるが、今は其の一首だけを掲ぐる。

不レ負重逢石上期。　師來對坐共題詩。
蛟龍筆底松千尺。　磊磈胸中酒幾巵。

夙悟浮生眞一夢。　今尋二異境一有二深思一。
三乘願此長相駐。　古刹看レ雲到處隨。

與二同文諸友一招二飲笠雲上人於二東臺之麓無極亭一。席上賦贈

雲海子爵

雲海子爵は、詩を嗜み、更らに酒を嗜む。家洪水翁は、維新の際、子爵の知遇を忝うし、其の關係尋常でなかつた。予一日子爵を老龍庵に邀んとし、吾母に向つて、禁酒の厲行の除外例を懇請したるも、許可を得なかつたから、その儘となつた。今にも心殘りがある。

（其十三）　石井十次君

追々と筥底を探るところ、『石井十次君最終の手紙、保存』と封筒の上に、予が自記したる一通を見出した。而して其中から、表面『東京日吉町國民新聞社　德富猪一郎樣　親展』裏面『日向國茶臼原　石井十次』とある。而して到著地の郵便

消印には『京橋、大正二年、十二月二十五日』とある。

謹啓大正二年十二月十六日夕御認めの御見舞狀著、感涙もて妻と共に拜讀いたし、かかる御親切なる御手書をいただきては、私はモー今晩此世を去りても、遺憾はなしと相語申候。七月初旬以來、病床に呻吟せし小生は、一時は自分でも、モハヤ本年はとても超過出來ざる可しと、覺悟仕候ひしことも、度々有レ之候へども、幸にして、今日にては、復活の希望を抱く樣に相成候間、御休神被レ下度願上候。

病中も出來る丈は、毎朝國民新聞の時務一家言と、東京だより丈は拜讀いたし候。特に『政治家としての桂公』は、先生の御心中を拜察いたすために讀んでさかせてもらひ、共に泣申候。

奥樣よりの御通信にて、先生も近年靜岡縣下の方に、時々御靜養被レ遊候由、私共の如きものは、生存してもせぬでも、日本國家と云ふ點からは、何の價値も關係も無二御座一候へ共、先生の如きは、特に今日の如き行き詰りたる日本社會にては、豫言者として、國家の大示導者として、一日も御存命の大必要有レ之候故、何卒十二分の御靜養を被二成下一、益々御奮鬪被レ下度願上候。

時務一家言にて、近來少しは世の中が、夜がアケカケタ樣に、田舍の隅迄被レ感申候。益々御自愛被レ下度奉レ祈候。

大正二年十二月二十三日

石井十次

德富先生

本年茶臼原は籾千七百俵、サツマイモ二萬貫位の收穫有レ之、私が半死半生の中にも、皆々滿腹主義を實行仕居候間、御安心被レ下度願上候。

此れが半死半生の大患者の手書とは、とても思はれない。記者は偶然茶臼原から、最近石井未亡人の手書を得、今更ら感慨禁じ難きものがある。石井君は眞に其の類中に於て、日本が生産したる稀有なる偉男兒であつた。(大正十四年八月—九月)

故淇水先生夫人

大正八年五月七日の朝、相州湯河原の旅館岫雲樓に於て、此文を綴る。二月十六日の夜、青山艸堂に於て、病に臥して以來、八十有餘日、始めて原稿紙に對す。其の書かんと欲するは、吾母の事也。予は決して、亡母の頌德表を作らんとするものにあらず。將た亡母の人物評、若しくは傳記を編せんとするものにあらず。唯だ予が年來亡母に就て、印象したる一片を、眞率に、平直に語らんと欲するのみ。

此れは多年罔極の恩愛に、酬ゆる所以のみならず、單に一個の女性として見るも、彼女は予が知り得る限りに於ては、異常の性格を具有したりと、信ずれば也。されど人は其の親愛する所に於て僻す。彼女の子たる予が、如何に離隔的精神を把持し、第三者の立場より觀察せんと欲するも、絶對的公平の態度を徹底するは、頗る困難の業ならむ歟。

大正三年五月廿六日、吾父淇水老人の永眠以來、吾母は逗子老龍庵より、東京青山に移轉し、予等と同居せり。是れ本來母の志なれば也。母は老人在世の際より、逗子の閑靜を好まず、東京の熱鬧を愛したり。但だ其の夫たる淇水老人の爲めに、彊めて逗子に在りしのみ。

予の書齋と、母の室とは、中庭を隔てゝ相對せり。而して其の年齡と、其の衰弱とに不似合なる、雄健なる音聲は、恒に我が書窓に響き徹せり。母の居室は、我が全家面積の、約三分一を占め、殆んど一種の倶樂部然たる觀を做せり。母の親交ある老人會連中、敎會連中、殊に多數の親戚、外姪、外孫より、更らに其の緣を辿りたる者、其他有緣も、無緣も、殆んど平等無差別に、食時には食を饗し、浴時には入浴せしめ。苟も來訪する者は、悉く之を歡迎したり。

予は筆硯に親み、特に近時は、修史の爲めに、全く門を杜し、客を謝したりしも。

母は全く門戸開放にて、均しく一家の中にも、鎖國と、開國との兩者併び行はれて、相戻らざりき。此の如くして吾母は、大正三年五月より、大正八年二月迄、足掛け八十六歳より九十一歳迄、約五個年の歳月を、青山艸堂に暮せり。

予は母の最終の生活が、母に於て一生中の、最も適意の生活たりしを、信ずるもの也。乃ち其身を養ひ、併せて其志を養ひたりと、信ずるもの也。而して此の如きは、予が長姉山川常子の、自から老齢、且つ病羸に拘らず、恒に母の左右に在りて、一切の事に任じたると。吾妻の母の意志に奬順し、殆んど全力を傾倒し、献身的に奉仕したるとの、二者に歸す可き理由多きを、信ずる者也。

予は近年旅行する毎に、恒に母の身上を危惧するを禁ずる能はざりき。何となれば其の老齢と、其の衰弱とは、恒に彼女の萬一の警戒を要したれば也。白狀すれば、母の本年迄生存したるは、醫師にも、近親者にも、全く奇蹟なれば也。

本年二月十六日の日曜には、予が第三女久子の婿たる可き阿部賢一氏、倫敦より歸朝したれば、予は彼を母の室に伴ひ、種々の閑話をなしぬ。斯くて同夜半より、予は病に罹りつゝありしとを、漸く自覺したり。爾來全く床上に打臥せり。越えて十八日、予は吾妻に向つて、母上は未だ見舞に來り給はざりしやと問へり。そは予が偶々小病あれば、母は廻廊を、看護婦やら、老姉や、家婢等に扶けられ、概ね予の寢室に見舞する、慣例ありしを以てなり。

軈て人あり、吾が病床の側に在りし妻を、急に喚び去れり。稍や久くして妻の歸來するや、予は枕上より其顏を見て、事の容易ならざるに驚きぬ。妻は予に向つて曰く、落膽し給ふ勿れ、母上は只今往生し給へりと。予は餘り其事の意外なるに—豫て萬一を期したりとは云へ、當日午前に吾妻の母と、會談したる事を知り居れば—落膽することさへ能はざりき。當時母は平常の如く、午餐を喫したり。平常の如く、新聞を、看護婦に朗讀せしめたり。而して平常の如く、安臥せり。而して一聲『もーだめだ』と呼ぶや、其の周邊の者共馳せ附けたるに、事既に了

りしなりと云ふ。

予は從前より、此機に後るなからんとを、心掛け居たり。然るに今や同一の家屋の裡にありて、遂に之を逸し、加ふるに重患の爲めに、柩前に燒香するさへ能はず、葬送に列するさへ能はず、思へば思へば口惜しく、心苦しく、唯だ病床に呻吟したるのみ。但し母の爲めに、墓標を書したる、宗演師の如きは、母の往生を以て、如何にも立派なる往生と、讃したりと傳聞す。

母は最近三十餘年、熱心なる基督教徒たりしも、從來儒教の素養もあり、且つ宗演師等の所說をも參取し、得る所固より少からざりしなる可し。豫て自分は淇水老人程の、善人にあらざれば、とても百花の好時節には、往生六ヶ敷からん抔と、戯れ居たりしが。其の死際の立派なる一事は、淇水老人にして、地下に知るあらば、定めて驚嘆するなる可し。予は實に之を以て、吾母最後の勝利と、信ずるもの也。而して長へに吾母の誇りの一と、信ずるもの也。

吾母は肥後上益城郡杉堂村の鄉士、矢島忠左衞門、其妻三村氏鶴子の第四女にして、久子は其名也。其の同胞八人あり。男子は矢島直方と云ひ、淇水老人同年の學友たり。未だ二十歲を過ぎずして、已に郡治に其の才幹を發揮し、小楠門下高足の一たり。中年以後、不羈、跅弛にして、小楠翁も之を裁するに苦しみ、遂に未製品の英雄として、末路落寞に終りしも、固に一世の快男兒たるを、失はざりし也。

彼は其の同胞中、最も吾母を愛重し、吾母も亦た、其兄に敬事したり。七人の姉妹は、何れも尋常の婦女ならず。特に吾母の姉、竹崎順子の篤行、吾母の妹、矢島楫子の精力の如きは、恐らくは吾母の、及ばざる所たりしならむ。然も彼女等の、吾母に及ばざる點ありしも、亦た掩ふ可からず。予は少しく吾母に就て、予の所見を語らんとす。

吾母は健康と、容色とを除けば、其他は殆んど總て豐富なりき、時としては餘り

に豐富なりき。凡そ情緒の極めて濃厚なるものは、意志の動もすれば、薄弱なるを免れず。然も吾母は、此の兩者に於て、何れも普通以上なりき。一方に非常に涙脆きかと見れば、他方には萬牛も動かす能はざる意志ありき。猫兒の死したるに際してさへも、食甘からざる母には、極めて思切り善く、諦め善く、其の六十七年同棲したる、淇水老人を喪うたる老寡婦として、尙ほ殘餘の五個年を、極めて幸福に、快活に、光明に送れり。

愚痴を滾すは、多くの女性の特色也。然も吾母には、一生殆んど愚痴なかりし也。吾母は固より普通以上の、長き過去を有したり。而して其の長き過去の記憶は、必ずしも幸福と、快樂とのみならざりしや論なし。然も予は未だ曾て吾母の過去に就て、語りしを聞かず。而して偶ま語るあれば、子女の爲めに、前人の嘉言、善行を述ぶるに過ぎざりし也。彼女には過去の重荷なるものは、一切是れあらざりき。伯夷叔齊は舊惡を念はず、怨是を以て稀なりとは、殆ど吾母に於て、

る數月前に於て、其の看護婦の二人迄もが受洗したり。是れを以ても如何に吾母の宣傳力の、最終迄旺盛にして、且つ有効なりしかを察す可し。

若し或は、吾母の缺點とも認む可きものありとせば、そは餘りに其の感情や、意志や、其他彼女の具有する諸稟資の豐富、饒多にして、動もすれば其の調節、整齊を失せんとしたる傾向ありしこと、是れのみ。

要するに彼女は程好き度合にては、何事も滿足ずる能はざりし也。是れ卽ち彼女が物に接し、人に對する上に於て、徹底的なる所以にして、其の美德、長所、此處に存するや疑ふ可からずと雖も。されど其の自發的、天然的勢力の、餘りに一方に傾注するや。宛も瀑布の、千仞の絕壁より、落下する如く、其の禦ぐ可からざるものあるが爲めに。却て他方に於ては、それ丈の缺陷を生ずるを免れざりしは、蓋し已むを得ざるの數のみ。

されば予は、吾母が二十歲にして、淇水先生に嫁したるを以て、其の畢生の幸福

たりしを、疑ふ能はず。吾父は餘事は兎も角も、吾母に對する調節力たり、制裁力たり、整齊力たり。而して吾母は亦た、吾父に對し、刺戟力たり、推行力たり、排進力たり。此に於て吾父に於ても亦た、二十七歲の壯時に於て、矢島氏の女久子と、結婚したるの、其の一生に於て、得たる所決して鮮少ならざりしを信ずる也。予は物心の附きし以來、竊かに我が兩親の、何人なるかを考慮し、且つ其の相互の關係に就て、觀察したり。凡そ世の中に、似た者夫婦と云へり、されど予は未だ我が兩親の如く、其の性情、行徑、相反するものを見ず。

然も彼等は嘉永元年より、大正三年迄、吾父の二十七歲より九十三歲に至り、吾母の二十歲より八十六歲に至る、凡そ六十七年間同棲したり。而して互ひに相ひ親信し、影の形に添ふが如かりき。而して遂に何等の感化をも、我等が識認する程、各自の性格の上に、互ひに相及ぼさゞりしは、不思議と云へば、此上の不思議はあらざる可し。

彼等各自には、歲月と與に、進歩もあり、變化もありしならむ。されど彼等兩人が六十七年前、祝言の席上に於て、杯を交したる夕も。六十七年後、永別の病牀にて、手を握りたる曉も。自他の關係は、兩人共に依然たる故吾にてありき。彼等の如きは、所謂る和して同ぜずと云ふ可き歟。

德富家と、矢島家とは、其の家柄相匹せり。我等の父方の祖父も、母方の祖父も、與に其の同僚たり。但だ德富家は、肥後の南端葦北郡にあり、矢島家は城北上益城郡にあり。其の距る約三十里のみ。而して兩家共に所謂る横井小楠の、實學派雰圍氣の中心に在りて、吾母の吾父に歸したるは、牛は牛連れ、馬は馬連れと云ふ可きに似たり。

然も吾父は、文政五年壬午に生れて、吾母は同十二年己丑に生る。彼等の稟質は、馬と牛との相違以上に、相違せり。予は子供心にも、吾母の淇水先生の手に餘る、難物たるを見て、心竊に吾父に同情したり。而して後日に迨んでも、時と

して、彼は果して、理想的の夫婦たる可きや、否やと疑へり。

然も仔細に看來れば、彼等は最後迄、抵死迄、互ひに其の個性を把持し、發揮し、殆んど互ひに交讓する所なかりしが如きも。然も一切を乘除して、實に理想的夫婦たるを、肯定せざるを得ざりし也。

其の日常の瑣事に於ては、吾母は吾父の趣味に徇へ、性情に遵ひ、自個の獨自一己を枉ぐるを努めざりしも。苟も吾家の大故に關し、吾父の大事に際しては、吾母は實に、吾父の第一の親友たり、顧問たり、戮協者たり、鼓吹者たり、支持者たりしや、疑を容れず。而して吾父の一生に於ては、公は出處進退より、私は一家の經營、子女の教養に至る迄、吾母の内助を要したるもの、多大なりしや知る可し。されば其の重要なる意味に於ての、内助者たる吾母は、自餘の行徑に於ては、殆ど自個の意の向ふ如くに爲せり。吾父も亦た、本來非常なる規帳面屋たりしに拘らず、之を認容したり。

今ま少しく具體的に之を陳ずれば、吾父は家を本位としたり。されど吾母は、必らずしも然らざりき。吾父は穩健なる差別者なりき。されど吾母は、察ろ平等者なりき。吾父は極めて小數なる親友、舊故、及び血族の者を喜ぶも、雜客を好まざりき。されど吾母は、一日訪問の客なければ、甚だ樂まざりき。父は『吾不與』を以て、其の書齋の名としたる如く、極めて身外の雜務に頓著するを欲せざりき。母は其の一身の起臥さへ、不自由なるに、猶ほ蜘蛛の網を張るが如く、八方に網を張りて、所謂る賴まれもせぬ世話を燒けり。

父は偶ま東京に來るも、湘南老龍庵に還りて、始めて吾家に還りたる思をなせり。母は寧ろ之に反せり。父は一日も速に、湘南に還らんと欲し、母は一日も長く、東京に滯在せんと欲せり。されば苟も其の身體の可能なる間は、教會や、老人會や、矯風會や、あらゆる會合には、必らず逗子より、東京に出づるを常とせり。而して其の東京に在るや、動もすれば日を累ねたり。吾父は時としては、

其の歸來を遲ちし程なりき。

吾父の集會に臨むや、最初に赴き、最初に還れり、是れ其の壯時より然りし也。

吾母は最初に赴き、最後に還るを常とせり。其の老後に於ても然りし也。其他日常の起居動作より、衣食住の嗜好に至る迄、殆んど悉く相反せり。若夫れ我父の最晩年には、基督敎を奉じたりしも、其の禮拜や、信仰や、飽迄淇水老人の本色を把持したり。彼等老夫婦は、互ひに其の所屬敎會を殊にしたりき。

然も一切を乘除して、彼等兩人は幸福なる夫婦にてありき。少くとも予が知り得たる、後の四十有餘年間は、理想的の夫婦にてありき。但だ若し人事をして、意の如くならしめば、吾父を女性とし、吾母を男性としたならば、更らにより圓滿なる夫婦たりしならんと思へり。

されど誤解する勿れ、淇水先生は、吾母に致されたりと。否々、決して然らず。吾父は恒に或る程度迄は、吾母の制動機たる目的を達したり。由來矢島一類には、脫線者多かりし也。而して脫線者の巨魁は、申す迄もなく、予が伯父矢島直方にてありき。而して我が淇水先生は、吾母を以て、最も乃兄に類似したりと云へり。是れ固より一時の戲謔たりしも、若干の眞理、自から其中に存せずんばあらず。然も吾母をして、乃兄の過に陷らざらしめたるは、一は吾母の女性たると、且又た其の修養の、尋常たらざりしに依るも、亦た固より吾父の力に是れ由らずんばあらず。されば吾母は、常に中心より淇水先生の忠信、篤敬にして、常軌に中るに感服し。常に淇水先生の注意深き、親切なる制裁に、感謝しつゝありし也。而して先生の正直には、とても叶はぬと、常に口癖の如く、我等に語りたりし也。

吾母の德富家に歸せし時には、德富家は頗る複雜なる家庭たりしが如し。祖父美信君、其の夫人、卽ち予が祖母德永氏夫婦は勿論。美信君の繼母田浦氏、尙ほ吾家の本邸に生活したり。而して淇水先生の弟妹若干、尙ほ家に在りしは勿論、淇

水先生に次ぐの胞弟一義君夫婦は、美信君、淇水先生等と與に、役邸に同居したり。斯くて一義君夫婦は、一女を殘して、時疫に罹りて逝けり。淇水先生夫婦は、直ちに其女を養女とせり。是れ他日松枝氏に嫁したる、予が義姉靜子也。

此れよりして予が同胞の山川常子、河田光子、大久保音羽、湯淺初子の四女子は、逐次に生れたり。德富家に男子の生れざりしは、一家の尤も不幸としたる所にして。湯淺氏に嫁したる吾姉の、第四女たるに拘らず、初子と名けられたるは、男子たる可く期待して、女子たりしかば、此を以て女子の最終となす可く、故らに初子と名けたりと聞けり。

當時淇水先生の、胸中の懊惱を遣りし詩、今尙ほ遺稿中に在り。德富家に女子のみ出生したるは、必らずしも吾母一個の責任にあらず。されば予は尤も吾母に同情せざるを得ず。

予は今其の理由の如何を、詳にせざるも、予は實に吾母の生家、矢島氏の杉堂村の邸宅に於て生れたり。而して吾母は、凱旋將軍の如く、其の五人目に、始めて出生したる男兒を、馬背に駄し、三太郎阪の險を越えて、葦北なる德富家に復歸したり。一家の歡迎知る可き也。而して此れより新なる光明は、德富家に湧き、吾母の吾家に於ける位置の鞏固と、重要とを加へたるは、云ふ迄もなかりし也。

但し吾母は、氣象の雄々敷に似ず、其の身體は業に既に羸弱に、而して其の視力は衰へ、衣類の縞柄さへも、辨識するに難かりしと云へり。予は淇水先生四十二歳、吾母三十五歳、文久三癸亥の正月廿五日を以て生れたれば、今日より見れば、必らずしも晩年の出と云ふ可らず。

されど四十以上を、初老と云ひし當時に於ては、祖父母は勿論、淇水先生夫婦が、いかで之子が跡目を無事に、相續し得可き乎と掛念し、遮二無二、一度に兩三年も飛び越させたく、焦り立てたるも、未だ必らずしも理由なしとせず。予が

年齡不相應に、老人じみたるは、殆んど先天的の約束と云ふも妨げず。予が姉等は、予に向つて、御身こそ父母の全精神を注がれし一子也と云へり。そは兎も角も、予は子供の時より、子供として待遇せられず、恒に一人前の男子として、待遇せられたり。幼時に於て、殆んど同年の友なく。何等の遊技、嬉戯に與らず。唯だ消化し難き程に、過重、過大、過多なる教育を、注入せられたるのみなりき。予が一生の得失は、恐らくは此中にあらむ。

人は皆な其母を慈母と云へり、されど予が母に對する古き記憶は、其の慈愛にあらずして、其の嚴厲にあり。

當時淇水先生は、國事の爲めに、四方に奔走せしかば、代りて子女の教育に當りたるは、實に吾母なりき。特に予に對しては、寸毫も容赦せず、叱責、戒飭のみならず、屢ば體刑を授けたる事は、五十餘年後の今日にも、歷々心頭に上りつゝあり。予が今日あるは、淇水先生の教誨、感化は勿論なれども、母の庭訓に由る所、多大也。他の同胞に對しての如何は、姑らく措き、唯だ予に於ては、世間の所謂る嚴父慈母を顚倒して、慈父嚴母と云ふを、此の場合に於ては、却て適當と爲す可きに似たり。

吾母は幾許の學問の素養ありし乎、予固より之を詳にせず。されど予は、母の乳房を含みつゝ、既に『月落烏啼霜滿レ天』とか、『雪中松柏愈青青』とかを習誦したり。四書の素讀の如きも、其の若干は、母よりして授けられたり。十歲內外に際しては、太閤記やら漢楚軍談やら、三國志やら、あらゆる軍書類を、母の病牀の側に於て、朗讀せしめられ。其の難讀、誤誦の文句に就ては、眼病の母は、其書を驗するに由なく、前後の關係より類推して、之を訂正したり。但だ母の視力の薄弱は、親から讀書するの便宜を缺き。且つ居常活動を愛する性質は、苟も病臥せざれば、奔走するの傾向ありしが爲めに、此の方面に其力を專らにする能はざりしのみ。

然も公平に云へば、終生兀々として作りたる吾父の詩よりも、僅かに其の餘力を以て詠出したる、吾母の和歌は、寧ろ文藝的價値多かりしが如し。其の筆跡に至りては、淇水翁の渾熟、溫雅に及ぶ可くもあらざりしが、偶ま揮灑すれば、頗る雄健、丈夫の氣象あり。現に本年九十一歳の、元旦の試筆振を見ても、老眠朦朧、殆んど紙上に暗中摸索して、塗抹したるに拘らず、毫も衰颯、枯弱の風なき也。予は母を目して、最も敎養ある婦人と云はず。されど學問、文藝上に於て、非凡の稟資を有したるを、識認せざらんとするも能はず。

されど若し吾母を以て、單だ學問臭き婦人とせば、それより大なる間違はなき也。彼女は算盤勘定にも達者なりき。但だ之に齷齪たらざりしのみ。針を持つ業や、絲を操り、機を織り、其他料理、活花等、あらゆる婦人の嗜は、一として心得ざるはなかりき。特に活花、一絃琴抔は、六十以後、八十過迄、修業したりき。而して就中三絃には、最も堪能なりしとは、彼女を知る者の、何れも語る所なりき。晩年は仰臥して、三絃を抱きつゝ之を彈けり。更らに最後には、團扇を三絃に代へて、之を胸に當て、小謠を微唱しつゝ、之を樂めり。但だ予は遂に吾母の晴々敷、三味線を彈きたる場合に、出會せざりき。

如何に贔屓目に見ても、吾母は月並的の、良妻賢母とは云ふ可からず。此の如き模型に嵌るには、彼女の同情心、餘りに博厚に、彼女の活氣、餘りに旺盛に、彼女の意志の力、餘りに剛鋭なりし也。されど其の實質に就て云へば、淇水先生の爲めには、寔に良妻たり。我等の爲めには、洵に賢母たり。

若し所謂る內助なる意味が、心靈的、精神的にありとせば、吾母は淇水先生第一の、內助者たりし也。若し賢母なるもの、其の子女の敎養を全うするにありとせば、確かに賢母と云はざる可からず。

予が知る限りに於ては、早く他家に歸したる義姉、長姉兩人を除き、河田氏に歸せる姉には、專ら機業を習得せしめ、大久保氏に歸せる姉には、專ら生絲業を習

得せしめ、湯淺氏に歸せる姉には、專ら英語を習得せしめ。何れも婦人として、獨立し得る丈の或物を、其身に所有せしむるを期せり。而して此れが爲めに、費用と、勞力とを愛しむ所なかりしは云ふ迄もなし。

當時交通不便の際、九州の端より、妙齡の處女を、東京、若しくは關東邊に遊學せしむるは、決して尋常の事にあらず。乃ち我等男子の敎養に於ては、猶更ら云ふ迄もなし。是れ淇水先生の賜物と雖も、其の主動力の吾母たりし事は、掩ふ可からざる也。されば予は云ふに及ばず。我が現存の姉の四人、何れも母に對して、深甚の感謝と、敬愛とを、捧げざるはなき也。

吾家は從來決して富豪と云ふ家柄にあらず。されど一鄕に在りては其の生活は、決して第二位に就かざりき。但だ淇水先生の國事に奔走し、公共の爲めに、家資を愛惜せざりしと。維新以來、熊本藩政に參與し、縣治の當初に於て、亦た重要の位地を占めたるとに由りて、家產の半は墜落したり。

明治七八年以降、明治十七八年迄、約十箇年間は、全く無收入にて生活し、而して此の期間は、最も子女の敎育費を要するの時にして。此が爲めに吾家は、蚯蚓同樣、土を喰うて生活したり。言ひ換ふれば、世襲の山林、土地を賣却し、甚だしきは家傳の什物迄にも、手を著けたり。當時如何に謹厚にして、處世に面皮薄き淇水先生の、懊惱したる乎、之を察するに難からず。

我が祖父美信君は、矍鑠として、尙ほ葦北の舊廬に、儼在せり。純孝なる淇水先生が、此が爲めに其老父の感情を、害するなからんとしての苦心は、果して幾許なりし乎。但だ其の背後に吾母あり、富貴を見る浮雲の如く、一切を犧牲としても、子女の敎育を全うせんと勗め。而して家道の衰微の如きは、寸毫も意に介するに足らざるの元氣を以て、淇水先生に聲援し。稍〻此の難關を、切り拔けたりき。

正直に白狀すれば、予が京都、東京の間に遊學中は、吾家甚だ富まざるも、若干

の餘裕ある可きを豫期したり。されば予は、自個の學資の若干を、他に頒ち給したる程にてありき。歸來其の現狀を見て、一驚を喫したり。此に於て予は、淇水先生を扶けて、家政を整理したり。明治十八年に至り、祖父美信君長逝し、予其の遺產を相續するを得、再び小康を得、十九年を以て、全家東京に移轉したり。此間の遺繰は、全くと云はざる迄も、多くは吾母の力に賴れり。假令母の家族的社會主義とも云ふ可き、無差別、博愛の爲めに、家政を一層困難ならしめたる事實ありとするも。一切の困難を切拔けたる大部分は、母の賜物也。吾母は此の場合に於ては、內助者以上の働をなしぬ。

予は吾母の氣質を語る爲めに、一二の實例を擧ぐるを禁ずる能はず。明治四五年、卽ち予が十歲未滿の頃、母に伴はれて、熊本唐人町に行けるに、偶ま西洋小間物店の肆頭にて、其の頭端より自動的に穗尖を出入上下せしめ、他の尾端に小刀を挿みたる、鉛筆軸あるを見、心之を欲するの色ありき。吾母は之を見て、其の値を問ひ、何の造作もなく、自から著けたる羽織を脫て、其肆に預け、之を購ひ予に與へたり。惟ふに財布を失念したるが爲めならむ。當時淇水先生は、熊本に於ける重要なる官吏にて、其の夫人が、此の如き手輕き事を敢てするは、其子たる予が目にも、意外に映じたり。

凡そ吾母の果斷、神速にして、思ふ所、直ちに之を行ふ、槪ね此類也。如何に其の仕事がキビキビして、傍觀にも心地善き程なりしよ。吾母の目には難題なく、吾母の手には難事なし。蛇行的思案分別の如きは、吾母の一生爲すことを屑とせざる所なりき。

明治十年西南の亂あるや、淇水先生、及び京都に遊學したる予を除くの外、吾家の家族、其他の親族は、槪ね母の里方矢島氏に避難したり。伯父矢島直方は、敵味方鎬を削る眞中を、例の氣質なれば、無遠慮にも、馬上にて橫行し、此が爲めに薩肥軍の指目する所となれり。偶ま人あり急を報ず、母は自から接伴者となり

て、妙齡の女子共を、屋後に隱匿し、其の來るを待受けたり。案の如く逮捕者は、倉皇として門内に闖入し、土足の儘、座敷に踏み上れり。而して彼等は餘りに息急き、咽焦きつゝ、何れも勝手口に赴き、柄杓の儘、水瓶より水を滿引しつつありき。

吾母は之を見て、落ち付き拂ひつゝ、逮捕者に告げて曰く、此家の主人は決して逃げも、匿れも、致し申さず。尋常に伴ひ去られよ。併し、土足にて疊に上るは、作法にあらず。若し飲料が欲しければ、茶なり、水なり、茶碗に酌んで差出す可し。兎も角も靜に願ひたしと。此に於て彼等も、餘りに其の度胸の善きに慚怍し、頓に態度を一變したりとは、目擊者の予に語りし所にてありき。併し此れしきの事は、吾母としては、決して不思議にあらず。彼女は不用意の場合には、時として其の感情、一時に爆發するを免かれざりしも。一たび大事に際して、其の意志を定むるや。白刃眼前に閃くも、決して瞬きだもせざるの度胸ありし也。

吾母は普通の婦人の如く、饒舌家にあらざりき。されば其の初めて德富氏に嫁するや、出入の者共は、新到の媳樣は、莫迦者ではなきかと云へり。此れは其の無愛相なりしが爲め也。

されど吾母は『見人說法』の妙を會得したり。喋々、呶々せざるも、一言、一句、必らず相手に、手答なくんば止まず。若夫れ相手の云はんと欲する所を察して、先づ之を說くが如きは、母に於ては尋常の茶飯のみ。是れ自ら聰明を衒ふにあらず、其の靈覺力の異常なりしが爲めのみ。然も吾母に多しとするは、其の爽朗なる辯舌にあらず、其の石の如き沈默と爲す。

沈默は吾母最後の隱家也。如何なる不愉快なる言辭を弄する者あるも、如何に吾母の感情を刺戟せんとする者あるも、彼女一たび意を決して沈默すれば、何人も、其口を開かしむる能はざる也。乃ち其側に叱咤する者あるも、號哭する者あるも、罵詈する者あるも、呪詛する者あるも、此の如き者あればある程、愈よ其の

沈默は緊嚴となる也。

されば暴を懲らし、瞋を鎭め、風波を收め、平和を恢復するには、吾母の一默は、他の千萬言に勝るものありき。吾母の雄辯は、人籟也。其の沈默に至りては、實に無限、無量の力を藏したる者に似たり。

矢島氏一類は、概ね一種の反抗神精神を有したり。卽ち權勢に反抗し、暴力に反抗し、不義の富に反抗し、月並的社會の規法に反抗し、世俗的調子に反抗せり。

吾母の如きも、確かに其の血液の若干を、血管中に藏したりしが如し。

されば吾母の趣味は、陽德にあらずして、陰德にあり。其の同情は成功者よりも、失敗者にあり。其の恩惠の順序は、親近より疎遠に及ぼさずして、却て疎遠を先にして、親近を後にするが如き、傾向なしとせず。是れ彼女の一生を通じたる、自然的傾向にして、彼女の特色は專ら此に存すと云ふも、不可なかりし也。

淇水先生は、吾母の未知の人の葬送に會したりとて、世の中に物數寄も程がある

と一笑せり。されど知邊の祝宴に赴くよりも、未知者の葬式に臨むは、寧ろ吾母の欲する所たりし也。

我が淇水先生は、天成の順流家なりしも、吾母は天成の逆流家とも云ひ得可きものありき。されど順流と云ひ、逆流と云ひ、自から融合會通する所あり。是れ我が父母が、各自各個に其の特質を把持しつゝ、互ひに諒解し、互ひに愛親したる所以也。

吾母は最も虛榮を厭へり。若し强ひて虛榮心ありとせば、その虛榮を厭ふ所に於て、之を見出すと云ふも可也。吾母は極めて無慾なりき。若し强ひて慾ありとせば、その無慾なる點に於て、之を見出すと云ふも可也。乃ち自ら取らざるの慾也、人に與へんとするの慾也。されば其の死する日は、半錢の私蓄なかりき。其の遺物を、親戚に分配せんとするも、其の簞笥は、概ね空なりき。蓋し特に母の爲めに新たに裁したる衣を、一たびも著けずして、其儘他に與へたるが如き例

は、彼女に於ては、稀有の例にてあらざりし也。

彼女の畢生の受用は、富めるに繼ぎ、餘れるに與ふるにあらずして、足らざるに給し、貧しきに施すにありき。されば單に其の形跡のみを察すれば、親しき者を疎み、疎き者を親しむとも見る可きものなきにあらざりき。蓋し自ら立つ者は、助くるに及ばず、唯だ立ち得ざる者、之を助けざる可からずとは、吾母の哲學にてありき、信條にてありき。

吾母の磊落、開豁なる、殆んど人に向つて語る可からざる事を、有せざりしが如し。胸中に幾許の機略を藏し、經綸に富む吾母として、此の如きは、頗る意外なれども、事實は則ち事實也。されば吾母の意志に反せざる限に於て、相交るには、此程心持善き相手はなかりし也。

吾妻の如きは、明治十七年、十八歳にして、吾家に歸して以來、足掛け三十五年、遂に一回も、吾母より一の小言さへも、喫したる例あらざりき。世俗の所謂る邪推抔と云ふは、吾母には藥にしたくもあらざりき。吾等の東京に出たる當初は、母の身體も尙ほ隨意に外出するに妨げなかりき。されば吾妻は恒に母に隨伴して、隨處に赴けり。其の媳姑の相得たる、此れは家附の娘にて、主人は恐らくは婿養子ならんと、他人は往々噂さしたる程なりき。吾妻に對して然り、他に對して固より然り。

但だ其の意志を枉ぐる事に到りては、大小に拘らず、容易ならざりし也。乃ち最近數年、雨雪の日、風霜の朝、尙ほ動もすれば病を冒して、老人會、矯風會等に出席せんとし、奉養者として、看護者として、其側にある人々の言を聞かず。爲めに予をして、之を諫止せしめたる事、一再ならざりき。

母も予の苦手たり、予も母の苦手なれば、予が一たひ母の室に至り、僅かに其口を開くや、乍ち飜然として之に從ひたりき。而して別に强ひて行き度もなしとは、最後の負惜みにてありき。

予は吾母の家庭以外に於ける、功績を枚擧する能はず。然も熊本に於ける機業の如きは、吾母の企畫に負ふ所、少小ならざりしを信ず。吾母は淇水先生の在職中に拘らず、其の住宅の一部を割きて、工場となし、機業を開始したり。是れ婦人をして、其の職業を得せしめんが爲め也。其志を紹ぎたるは、義兄河田精一氏、及び吾姉河田光子にして、河田氏の淇水先生、及び吾母に於ける孝養は、所生も之に及ぶ能はざりき。

次には女子の精神的向上也。兎にも角にも社會をして、婦人の位地を識認せしめ、家庭をして、婦人を好遇せしめ、此れと同時に婦人をして、知識あり、教養あるものたらしめんとしたるは、吾母等の志望にてありき。吾姉湯淺初子等の、英書を學び始めたるは、明治四年頃なりき。其の婦人教育に熱心なりしや、以て知る可し。爾來直接、間接に、女子問題に貢献したる事は、言ふに及ばず。熊本に於ては、其姉竹崎順子を扶けて、熊本女學校を建立し。東京に於ては、其妹矢島楫子を扶けて、婦人矯風會を扶植したるが如き、僅かに其の一端に過ぎざるのみ。

吾母は婦人ながらも、尙是れ小楠門下の一人とも云ふ可く、治國平天下の道に於て、頗る得る所あり。最近三十餘年基督教の熱信者たりしも、亦た是れ特色ある信者にてありき。毎日三回宛祈禱し、其の衰弱起坐に勝ざる、尙ほ几に凭りて、兩回宛祈禱し、動もすれば、其の一回の祈禱、一時間餘に亙れり。傍人餘りに其の時間の長きを諷すれば、母は平然として曰く、世界の事を祈るからには、手短には行かぬと。

蓋し彼女は、外は獨逸皇帝の改悔より、內は一家最小者の身上迄も祈りし也。別言すれば彼女の最後は、祈禱せんが爲めに生存したりと云ふ可し。予は屢ば母と談話せんと欲し、其室に赴き、祈禱の爲めに、之を果さずして、引き返したる程なりき。

予は如何に考ふるも、吾母は理想的主義とは認むる能はず。又た圓滿、純醇の女性と認むる能はず。されど偉大にして、有力に、且つ善良なる婦人たるを、否定する能はず。予は斯母の予たることを、深く幸福とし、切に感謝し、唯だ其の恩に酬ゆるの、或は充分ならざりしやを虞るゝのみ。

吾母の進取力の旺盛なりしは、恒に予を激勵したり。彼女は九十一歳迄、善き意味に於ての、新しき女なりき。彼女には過去なし、只だ現在と、未來とあるのみ。如何なる新奇の物も、彼女には決して新奇にはあらざりき。如何なる突發の事も、彼女は寧ろ當然として、之を受取りたりき。而して彼女の宣傳力や、傳道心や、年と與に、愈よ激烈を加へたりしが如し。身は數尺の病牀に横はりつゝ、心は廣き世間に馳せたり。小は親族の緣談より、大は婦人運動の事迄、吾母の干係する所、實に複雜、且つ夥多なりき。彼女は日に日に新に、又日に新なるを期したりき。若し今日以後に於て、我が倦駑に、鐵鞭を加ふる者あらば、只だ吾母の記念のみ。

予が幼きや、母は吾が額を撫して曰く、せめて之子が十五になる迄、生き延びたきものなりと。當時母の健康狀態は、實に予が十五歳に達する迄、生存するを得るを以て、其の最長限度としたりし也。然るに吾母は、予が五十七歳に達する迄、即ち自から九十一齡に躋る迄生存し、然も其の最後の一分迄、毫も其の精神上に、一點の陰翳だも有せざりき。然らば則ち、縱令予、及び予が家族の孝養が、充分ならざりしとするも、母に於ては、大なる遺憾なかりしならむ。況んや其の血脈は、各所に蔓延し、其の恩愛の澤に浴したる者、四方に點在し、總ての者、母を祝福し、一人の母を呪詛する者なきに於てをや。母や以て瞑す可き夫。

（大正八年五月）

吾母の大祥忌

今日は吾母の大祥忌だ。彼女は大正八年二月十八日に逝いたから、世俗の所謂三年忌である。

昨日來の西南風は、相模洋の波濤を驅つて、千軍萬馬の馳せ廻る響を做しつゝある。予は夜半より目覺め、耿々として睡らず、彼是と吾母の事を思ひ續けて、天明に至つた。

吾母の永眠は、實に予が發病の、翌日の午後二時過ぎであつた。同一の家屋に住しつゝ、母の末期に會せず、其の死顏さへも見ず、葬送にも預るを得なかつたは、如何にも遺憾の事であつた。予は今尙ほ悔恨自から禁ずる能はぬ。當時の母は、如何なる心持で逝いた乎。唯だ一刹那の間であつたから、殆んど老木の倒るる如く、自然に逝いたのではなかつた乎。

月並的では嚴父慈母と云ふが、予の感想は、寧ろ慈父嚴母と云ひ度い。六十歳に垂んとする今日迄も、最も鮮明なるは、予の幼時に加へられたる、吾母の體罰だ。吾母は、予に對して、情愛も熱切であつたが、實に手緊しかつた。今日に於て何れの親か、其子を斯く折檻し得るかと思ふ。固より當人の予も、人一倍の腕白兒、我儘者であつたからとは云へ。併し予が兎も角も今日あるは、吾母のお蔭だ。予は今尙ほ吾母の鞭影に驚きて、自ら警醒する。

如何に割增しても、吾母は理想的の主婦とか、賢夫人とかとは思へない。併し如何に割引しても、偉大なる女性であつたと思ふ。予は吾母を懷ふ毎に、一般の女性に對して、敬意を表するを禁じ得ない。吾母は女性と云はず、男性と云はず、總ての人に共通する、敢て總てと云はざるも、多くの性格を、最も多量に、最も豐富に有して居た。其中にて、何物をも畏怖せぬ勇氣と、何事にも屈托せぬ辛抱力と、如何なる暗黑の裡にも、恒に一道の光明を見る樂天的性情とが、特に際

立て、今尙ほ予の眼中に映出せらるゝ。

單に肉體の點からすれば、吾母は最も同情に値ひする一人であつた。予が出生以來、一年中、何とか申分のなき日は、稀れであつた。最終の數年は、吾姉の常住看護以外に、兩人の看護婦を要した。然も予は吾母に向つて、同情を表するとが、何となく無禮であるかの如き感がした。否な其の精神の餘りに旺盛にして、彼女に同情を表するは、恰も三井や、三菱に向つて、慈善を施すが如き心地がした。併し吾母は決して、一大意力の大塊のみではなかつた。彼女は猫兒の病氣にさへ、眠り得ない程の濃厚なる情根の持主であつた。疎遠なる親類の子供の病氣にさへも、自から發熱して心配する程であつた。されば親類其他、彼女の知邊に起りたる事故は、成る可く吾母に知らせざる樣、恒に我等は注意して居た。

併しいざとなれば、吾母は實に思ひ切りの善き女であつた。否な男兒とても、到底彼女に及ぶ者は多くあるまいと思ふ。過去をして過去を葬らしめよとは、吾母の人事に對する態度であつた。彼女には過去がなく、現在と將來とのみあつた。

一家を主宰し、若しくは、整齊する主婦としては、彼女よりも超越した女性は、多くある。されど己が爲めに生活せず、他の爲めに生活し、其心恒に一身一家の上に在らずして、團體、公共の上に在る廣き意味に於ての生活、卽ち奉仕的生活者としては、殆んど理想的に庶幾かつたと思ふ。

予は二十歲以後、未だ吾父と爭うた例がない。然も五十歲以後も、屢ば吾母と爭ひ、且つ爭うて見たく思うた。そは吾母が九十歲になりても、尙ほ予と對抗する程の氣魄を具へて居たからだ。彼女の肉體は、枯木の樣であつたが、其の精神は何時迄も若々敷、生氣淋漓として居た。彼女の後半五十餘年は、全く其の意志の力にて生存して居た。予として見ず、母として見ず、全く第三者の立場より見るも、吾母は珍らしき女であつた。所謂る女丈夫とは、吾母の如き者を稱する、適當の言葉ではあるまい乎。

予は吾父に對して、自から志趣の卑下なるを愧ぢ、吾母に對して、自から意志の薄弱なるを愧づ。（大正十年二月十八日午前六時　湘南觀瀾亭に於て）

京都帝國大學構内の樟樹

一年の計は、穀を植うるにあり、十年の計は、樹を植うるにあり、百年の計は、人を植うるにありとは、古人の陳言だ。陳言ではあるが、矢張り名言だ。

家淇水翁は、恒に植樹を好んだ。翁の到る處、必らず樹を植う。晩年老を湘南に養ふや、樟實を肥後葦北より取り寄せ、樟苗を生産し、之を逗子、鎌倉、其他の知邊に分配するを、一の樂事とした。即今湘南―三浦郡―に樟樹の蕃殖する、他にも其因ある可きも、翁の努力も亦忘る可きものではない。

當時木下廣次君、亦た葉山に別業を設け、偶ま翁と相見た。木下君の京都帝國大學の創立者として、彼地に赴くや、翁は君に樟苗若干を托して、其の構内に植えんとを求めた。木下君快諾して、之を行うた。此れは明治三十年代、即ち日清戰役を去る、久しからざる時であつたと記憶する。

爾來京都帝國大學の總長も、幾代か更つた。木下總長も逝き、淇水翁も逝いた。但だ樟苗のみは、年は一年より繁茂しつゝある。固より枯損したるものも、少くなかつたとは云へ。記者は京都に遊ぶ毎に、概ね之を見舞はぬとはない。而して眞に低徊去る能はざる情がある。

併し今日になりては、此事を知る者は、殆んど記者一人だ。さればいかで此事を、後に傳へんと希ひ、友人河田博士に諮つた。博士の盡力にて、大學の評議員會より小碑を建つるの允許を得、更らに荒木總長の撰文幷に書の光榮を得た。

此樹、木下祭酒時、德富淇水翁所レ贈、忽忽二十餘年、祭酒既捐レ館、翁亦歸二道山一、而樹則蔚然日碩茂、使ヨ過者永懷二遺愛一焉。

大正十二年六月下浣

京都帝國大學構内の樟樹

良とに簡にして能く盡してゐる。而して其の小碑は、京都帝國大學教授法學博士河田嗣郎君、京都帝國大學圖書館司書金子正道君等の盡力にて、前年出來上つた。予はせめて友人、親戚一兩輩を集め、小なる落成式でも行ひたいと思うたが、震災後は、多事に取り紛れて、之を果さなかつた。

然るに頃ろ金子君より、其の寫眞を送り來つたから、貴重なる國民新聞の餘幅を假りて、此を掲ぐることとした。京都帝國大學からすれば、寄附者の何人たるは兎も角も、木下總長の遺愛として見れば、亦た愛惜、護持す可き理由が、ないでもない。記者に於ては、云ふ迄もない。（大正十四年五月二十五日）

京都帝國大學總長

荒木寅三郎識

矢島楫子

昨日矢島叔母さん—楫子夫人と云ふ可きであらうが、私は此際矢張り叔母さんと申したいのです—の病床の側にて、先般叔母さんの口授を、あなたが筆記し、婦人新報に掲げられたるものを、お示しの上、私に何か一言書くようにとのお賴は、正に承りました。此れは當人の叔母さんよりも、同樣の希望と信じますから、喜んでお受け致します。

右の原稿を一通り拜見いたしましたところでは、私が叔母さんに就て、從來知らなかつたことも、若干掲げてあります。併し知つてゐる事の多くは飛ばしてあります。故に此れが叔母さんの全傳でないことは、申す迄もありませぬ。筆記者たるあなたも、固より斯く認めらるゝであらうと思ひます。

併しながらさすがに、問題の主人公が、口授せられたゞけありて、云はゞ叔母さ

んの自畫像です。名人の自畫像は、雜作なきスケッチでさへも、傳神の妙があります。されば他人の千言萬言よりも、叔母さんの一言が、却て叔母さんの眞面目を描き得るものと信じます。此の意味に於て、是の書物は、無二の寶典であります。他日叔母さんの事に就て、彼是論評せんとする人も、又た問題が生ずる場合も、是書を憑據とせねばなりませぬ。されば是書は、叔母さんの此世に殘し給ふ遺物中の、唯一の寶物とは申しませぬが、寶物中の一に相違ありませぬ。而してあなたが、餘計なるおまけを付け加へず、叔母さんの言葉通りに、忠實に筆記なされた事は、良とに賢明なる仕方で、それを悅ぶ者は、恐らくは私一人ではありますまい。

私は今ま茲に矢島楫子論を書くのではありませぬ。併し此の機會に、平生思ふふしの一片二片を、陳べて見たいのです。矢島一族は、世にも珍らしき一族でありました。而して其の八人――一人を除けば、皆な女性――の同胞は、何れも尋常一樣の代物ではなかつたのです。若し曲亭馬琴の如き者が出で來りて、女性八犬傳を著作せんとせば、必らず其のモデルを、矢島の姉妹に求めたであらうと思はれます。其中でも、竹崎順子、德富久子、矢島楫子の三女が、最も卓越したるものと信じます。男子なる矢島直方は、申す迄もありませぬ。併し竹崎順子は、後の兩女に比すれば、聊かタイプが違つて居ます。彼女は寧ろ女聖徒です。後の兩女は寧ろ女豪傑です。併し同胞であれば、固より共通の點もあります。聖徒にも、何處やら豪傑らしきところがあり、豪傑にも何處やら聖徒らしきところもあります。別けて德富久子は、竹崎順子と矢島楫子の中間に生れたからでもありませうが、尤も双方の性格に似通うてゐたやうです。此れは私の母だから、或は贔屓目に見たかも知れませぬ。併し私は吾母の崇拜者ばかりでなく、其の批評者でありましたから、恐らくは此れが確評と信じます。

私が矢島の叔母さんを知つたのは、五十餘年前です。叔母さんが、林家を去り

て、おたつさんを抱いて、肥後の葦北郡水俣なる私の家に來てゐた時からです。當時――今は蟲をも殺さぬ――おたつさんが、日奈久人形もて、私の頭に穴を明けたと云ふ話は、親族間に持囃さるゝ逸話の一です。固よりその時の叔母さんは、唯だ朧げに覺えてゐた迄です。併し私が物心付て以來、東京なる矢島叔母さんの事は、熊本なる親族會議の話題となりました。私のお母さんは、その議長でなければ、少くとも幹事長格でありました。私の家は、屢〻親類の會合所となりました。何事にも敏感であつた少年の私には、それを餘所目に看過し、餘所目に聞き流す譯には參りませぬでした。私が明治九年東京に來り、神田裏猿樂町なる藤島伯母さんの宅に居ました頃は、矢島の叔母さんにも、屢〻面會する機會がありました。私共が十九年東上して以來は、申す迄もありませぬ。爾來逗子の宅でも、青山の宅でも、叔母さんは、恒に珍客として、驩迎いたしました。逗子や青山は、叔母さんに取りては、其の奮闘の原資仕入所であり、又た苦戰の休養所であり、又た其の策戰計畫の參謀部であり、又た靈肉一如の慰樂所であつたやうに思はれます。此れと申すも、叔母さんに取りては、二つなき姉である德富久子夫人がゐたからです。

私のお母さんは、眞に妹孝行でした。叔母さんの爲には、身を切つてもやりたいと思うてゐました。而して叔母さんを、世間へ出で〻働く〻我が身代りと思うてゐました。叔母さんも、私のお母さんには、餘程參つてゐたやうです。此の姉妹は、何れも其の流儀に於て、非凡でありましたが、互ひに共通した點が多いと同時に、亦た各自の特色がありました。

德富久子、矢島楫子對照の描寫は、姑らく他日に讓りますが、矢島の叔母さんは、實に偉い方です。偉いと云ふ一言で、叔母さんの生涯を、盡してゐます。叔母さんの運命は、全く叔母さん自身に開拓せられたのです。叔母さんは、必らずしも才女と云ふ分類に屬する仁ではありませぬ。又た文藻なども、貧しくはないが、

餘りに豐富ではなかつたやうです。殊更ら物事に小器用と云ふ程でもなかつたやうです。併し自恃の意志は畏る可き程でありました。一旦思ひ込めば石に喰ひ付いても離さぬと云ふ氣象と、深山幽谷の水が、千巖萬壑を劈き流れて、遂ひに海に入らなければ止まぬ徹底力とは、其の特有の財産でした。叔母さんは勿論信仰の仁です。然も神を信ずる力が、卽ち自から信ずる力です。言ひ換ふれば、自から信ずる力が、神を信ずる力です。前へ前へと押し進む力と、如何なる壓力にも、踏み怺る力とは、兩ながら卸賣しても差支なき程、自然に仕入れてありました。反抗的氣分は、矢島一族の共通性です。叔母さんの唯一の兄であつた矢島直方翁の如きは、殆んど反抗的精神の凝塊とも云ふ可きでした。特に叔母さんは、其の一身の境遇が、此の精神を刺戟し、長養し、而して遂ひに一個の矢島楫子なる、明治、大正の御代にかけて、日本に於ける一個の女性の一大抗議者を打出したのです。

叔母さんは、向ふ所可ならざるはなき仁であつたから、家庭の主婦としても、女子教育家としても、それ〴〵成功者となつたであらう。否な教育家としては、其の功績實に著明であります。併し叔母さんの本領は、婦人矯風會會頭として、始めて發揮せられました。婦人矯風會は、日本に於ける諸ろの社會的惡弊陋習に對する、一大抗議的、革新的運動の本部です。叔母さんは、其の渾身に溢るゝ反抗的精神を、此の方面に向つて善用した。叔母さんは日本に於ける、婦人の社會的事業家の急先鋒でありました。

世の所謂る急先鋒は、概して失敗者であります。叔母さんは急先鋒でありつゝ、寧ろ意外にも、成功者でありました。叔母さんには、矢島一族に、比較的缺乏したる成功者資格が、具備してゐます。それも水も漏れざる周到の用意です。無盡藏の隱忍力、辛抱力です。叔母さんは非常に勝氣であり、又た情熱も人一倍熾烈でありますが、其の堪忍袋は、其の底が廣く且つ深くして、容易に破れませぬ。

包容力は濶大とは申されませぬが、大概の難物、雜件は、悉く此の堪忍袋に仕舞ひ込むのです。叔母さんを、理智一偏の仁と思ふは、皮相の見です。併し彼の底光りのする閃きに、一睨せられては、何人も叔母さんを胡魔化す譯には參りますまい。

世の中に、作輟恒なしと申す言葉があるが、叔母さんは、それがありませぬ。叔母さんは、二六時中平均溫度を保つてゐます。叔母さんは熱海溫泉の如き、間歇泉ではありませぬ。叔母さんの粘り强さは、天下一品です。而して世間の毀譽に頓著せず、周邊の物情に拘泥せず、他人の顏色を見て、彼是と心配せず、唯だ一心一向に我が思ふ所、我が信ずる所、我が企てゝ成す所に、直前するのです。必らずしも全速力で駛るではないが、然も平步し、快步するのです。知らぬ人には横著とも見えます、傍若無人とも見えます。併し叔母さんは、それを平氣でやつて行くのです。斯る個人は、男子でも愚ろか、女性には別して、見出し易からぬ代物です。之に對しては、如何に叔母さんに對する苛酷なる批評家でも、驚異の眼を撥かずしては、ゐられますまい。

叔母さんは、外國語の知識なきに拘らず、三回洋行せられました。何れも老境に入りてからです。中の洋行は、八十八歲で、後の洋行は、九十歲です。八十八歲や、九十歲のお婆さんでは、荷物としても、容易の荷物ではありませぬ。此れは叔母さんの如き常識の發達したる方には、聊か不似合に思はれます。餘りに向ふ見ずであり、餘りに無鐵砲でありはせぬかと思はれます。併しそれが矢島一族の本色です。叔母さんも、本來其の血液を、多量に遺傳してゐます。其の所信に向つて、直前勇進するは、常識の力などでは、阻止するとは、能ひませぬ。常識は常識であり、自信力は自信力である。自信力で常識を支配するが、常識で自信力を支配するとは能ひませぬ。而して第三回目の洋行が、叔母さんに取りては、申す迄もなく最後の花でせう。

私は今茲に叔母さんの日本に與へたる功績の總勘定をなすのではありませぬ。併し叔母さんの爲めに、日本の女性界は、如何に恩惠を被つたでありませうか。單に女性界と云はず、日本の社會は、社會矯風のあらゆる問題に就て、如何警醒せられ、啓發せられ、刺戟せられたでせう乎。若し叔母さんがゐなかつたとせば、其の缺陷は幾許であつたらう。それを思へば、叔母さんの一身は、眇たる一婦人であるが、其の繫がる所は、實に大であつたと信じます。

更らに一歩を進めて申せば、叔母さんの關係したる事業は、國內的でなく、世界的であり、人類布遍的であるとを思へば、叔母さんは、或る意味に於て、日本を世界に代表する一人であります。固より唯一人ではありませぬが、推しも推されもせぬ其の重なる一人であります。乃ち此の意味に於て、叔母さんは、男性に於ける故大隈侯の如く、—代表の方面には、異同あるが—世界的日本人と申しても差支へありますまい。

叔母さんは實に日本女性の爲めに、東洋女性の爲めに、世界に向つて、氣焔を吐いたものと云はねばなりませぬ。此れが爲めに日本の國家的品位、國民的信用を、幾許上進せしめ、增加せしめたかは、今ま猝かに計上し難いとしても、決して之を無視するとは能はぬと存じます。乃ち叔母さんは、如上の理由によりて、その一身が世界に繫がれたのです。

日本の國家が、叔母さんに向つて、果してその功績に相當する待遇を與へた乎、否乎は、問題にはなりませぬ。叔母さんは決して斯る事を、念頭に措いて仕事をしたのではありませぬ。併し本年始の病氣に際して、皇后陛下の厚き思召には、流石に冷靜なる叔母さんも、感激の涙に咽びました。

私一個としては、大正八年二月に、お母さんを喪うてから、叔母さんを、お母さんの代りといたしました。お母さんの渾身の愛情の對象であつた叔母さんを大切にするが、逝けるお母さんに對する、せめてもの孝養と思うたからです。叔母

さんも、年と興に愈〻淨化せられました。平生涙一滴滾すことを愧ぢたる叔母さんも、何やら涙ぽくなりました。叔母さんは決して無情の仁ではなかつた。併し硬い厚い皮にて、之を大切に封じ籠めて居たのです。然るに流石に意地張りの叔母さんでも、追々年と興に箍が緩んだから、自然の情趣が、外面へ滲漏して來ました。世には年と興に强慾となる者もあり、邪慳になる者もありますが、叔母さんは、年と興に人間味が、段々加はりました。

叔母さんは、幼時から澁柿と云はれた通りのお澁さんでした。所謂る女らしき女でもなく、男らしき女でもなく、矢島楫子は、天地間に於ける一個の矢島楫子でありました。此れは今も昔も變りはありませぬ。併し今は眞に善良なるお婆さんであります。年も叔母さんの樣にして取れば、仕合せであります。叔母さんの人格は、幾多の風霜を經て、淨化するばかりでなく、美化しました。何たる幸福であらう。此れも其の前半生の人の知らざる艱苦の、乘除であつたかも知れませぬ。

私は昔の矢島叔母さんのみを知りて、谷中に眠りて居らるゝ藤島伯母さんがたに、今の叔母さんを見せたいと思ひます。

日本國民は、決して忘恩の國民ではありませぬ。私は他日必らず國民が、此の隱れたる、或は半ば以上隱れたる日本の恩人を、想起するの日ある事を信じます。その場合には、是書は必らず總ての人でなくとも、多くの人の思出の種となることを信じます。

一寸申譯に書くつもりでしたが、書きつゝある中に興が乘り、遂ひに意外の長談義となりました。

大正十一年十二月三日午前八時、逗子野史亭に於て。

守屋東樣

蘇峰生

矢島楫子

叔母さんの鹽梅は、定めて昨日同樣、順境と存じます。如何なる體でせう。驚く可き活力の權化ではありません乎。死の戸を屢〻叩いても容易に生の界を去りませぬ。九十一歳のお婆さんとしては、愈〻以て驚嘆の至りです。折角御看護を祈ります。

矢島先生

（大正十四年六月廿六日、青山會館に於て、矢島楫子告別式に際し、演說の一斑）

會葬者各位、前日本婦人矯風會々頭矢島楫子先生—私は先生と申すよりも、寧ろ叔母さんと申したいのです、併し此の式場では、矯風會の方々の唱へらるゝ通り唱へます—を、矯風會葬とせられたのは、當人に取りて、定めて本望であらうと存じます。當人は明けても矯風會、暮れても矯風會、其の念頭に掛つたものは、一に矯風會でありました。されば矯風會の皆樣方が、相ひ集りて、此の葬式を會の名をもて營み給ふと、如何ばかり當人に取りては、悅ばしき事で御座りませう。且つ青山會館を、其の場所と定められたことも、亦た滿足であらうと信じます。青山會館の成立には、先生も少からぬ感興を持つてゐられました。而して此の場所は、先生とも淺からぬ緣故があります。卽ち先生の姉にして且つ知己であり、其の隱れたる後援者の第一人たる、德富久子の其の晩年を送つた地であります。而して先生は、其の戰ひ疲れたる心身をば、恒に此處に來りて安息を求められました。されば最後の安息たる發途を、此處にて見送るとは、決して偶然ではありますまい。

更らに斯く申せば、聊か僭越に涉る樣ではありますが、不肖私が此の壇上に立つとも、先生に取りては、意中の事と存じます。餘程久しき以前、先生は私に矯風會の演說を賴まれました。私は元來演說が嫌ひでありますから、之を斷りました。然るに先生は故らに一書を送りて、

御身は予の葬式には、フロックコートを著て、是非共立會はねばならぬ義務ある人である。されば予の葬式に臨む積りで、今度は出席して貰ひたい。

との意味を告げられました。

又た最近數年間、私が先生を見舞ふ毎に、叔母さん、あなたの葬式には、必らず私が何か一言申しますから、御安心下さいと、繰り返しました。その度毎に、先生は快心の表情をせられました。

只今私が、此の壇上に立つを辭しませぬのは、故人と生前の約束があるからであります。併し私は、決して先生を譽むる爲めに立つのではありませぬ。唯だ當り前のことを申すのみであります。

葬式廣告の文句ではありませぬが、生花や造花の御寄贈は御免である。況んや言葉の花に於てをやだ。特に私は理る迄もなく、先生に就ては、當初よりの嘆美者でもなく、崇拜者でもありませぬ。實を申せば、故人の弱點、缺點、短所、不好所は、百も承知してゐます。私は如何なる具合であつた乎、幼少より此の叔母さんは嫌ひでありました。而して長き歳月の間、嚴正なる批評家の態度を持て、其の一切を觀察して居りました。されば私が故人を買ひ被るとか、褒め過ぎるとか申す心配は、斷じてありませぬ。

併しながら如何に峻嚴なる批評者として、之を觀察しましても、一切を乘除して、矢島楫子は、明治大正の御代に於て、偉大なる婦人の一であるとを、否定する譯には參りませぬ。其の日本に於ける女性の位地を、高からしめたる點に於て。其の世界に於て、日本女性の眞面目を發揮したる點に於て。其の日本に於ける教育、及び社會廓清事業に於ける功勞に於て。而して其の特殊なる性格の持主として、其の活ける模範を、現代及び後世に遺せし點に於て。

日本の歴史には、多くの偉大なる女性が、凡有る方面の役目を働いて居ります。恐れながら天照太神以來、神功皇后などの話は、姑らく措き。王朝時代の紫

式部、清少納言の文學に於ける、鎌倉時代の平政子、元龜天正時代の豐臣秀吉の正室、北政所の如き、若しくは德川時代の春日局の如き、何れも特色ある働きをなして居ります。恐れながら明治時代には、我が昭憲皇太后の如き、御方も在します。斯くて歴史を趁うて近世に至り、更らに現代に至りますれば、到底日本の歴史から、矢島楫子を見逃がすとも、見落すとも出來ますまい。若し明治大正の御代の女性を、史家が數へんとせば、縱令唯一人たらざるも、第一人でありませう。第一人たらざるも、少くとも其の中の一人には相違ありますまいと、確信致します。

矢島先生も亦た土から生れた人です。其家は一兩一疋と云ふ格にて、熊本に於ける鄕士であります。父は矢島忠左衞門直明と申して、循吏でありました。母は三村氏鶴子と申して、當時に稀れなる賢夫人でありました。私は今朝亡母が—楫子刀自の姉—嫁時に携へ來りました、外祖母鶴子の手寫したる、藪震菴先生の其女を嫁する際に、與へられたる訓書と、百人一首との二卷を、笥の底から取り出して見ましたが、中々見事な手跡であります。其人の聰慧なる性格が、文字の上にも、立派に現れてゐる樣に覺えました。

先生の同胞は八人、其の七人は女子で、先生は末から二番目です。此の八人の同胞は、何れも一風變りたる人々でありました。中にも先生の兄矢島源助直方、其姉竹崎順子、德富久子などは、殊に目立つて特色がありました。先生は勿論申す迄もありませぬ。

矢島直方は、未だ二十歲にならない前から、父の代役を勤めました。横井小楠の秘藏弟子でありましたが、やがて小楠の手にも及ばぬ漢となりました。彼は卓越したる天分を持つて居ました。而して二十歲に達する前に、それが殆んど發達し盡し、その以後は、別段進歩の效が見え無かつた樣でした。

明治十年の亂に、彼の鄕里は、殆んど戰爭の衢となりました。然も直方は、平氣

で兩軍の間を、馬に騎りて往來しました。やがて賊軍―當時の稱に從ふ―の爲めに縛せられて、木山の營に送られました。其時には德富久子―私の母―も亂を避けて、里方に歸りてゐました。久子は先づ亂を避けて來り集りたる、親類中の若き女性達を隱匿し、自から其衝に當りました。賊軍の人々が草鞋著のまゝ疊の上に、どか〳〵と上るや、久子は、直方は逃げも隱れも致しませぬ、緩々草鞋を解いて御上りなさいと申しました。彼等が喉渴きて柄杓もて、手桶から水を飲まんとするや、茶でも湯でも、御望み次第に差上げますから、靜かに召上れと申しました。而して彼女は、其兄を潔よく賊軍の手に渡しました。

直方は平氣で、木山の營に至り、是非自分を西鄕の前に伴ひ行けと申しましたが、賊兵は中々其望を叶はせませぬ。彼は退屈の餘、懷中から十圓札を出し、此邊には鰻屋がある筈なれば、鰻飯を取りて貰ひたいと註文した。斯る折しも賊將が其營を見舞ひ、彼の顏を見て、ヤー矢島君ではない乎、斯く云はるゝ御身は崎村氏ではない乎と、互ひに顏見合せて語りました。

崎村は熊本協同隊の主將で、直方とは、長崎以來の知人でありました。彼は直方を諭して、强ひて護衞兵を附けて、之を戰爭圈外に送り出しました。而して直方は、それから東京に至り、其の歸途私は京都同志社在學中で、京都で面會致しました。

先生の兄と姉とによりて、大概先生を推量することが出來ませう。

併し先生は兄よりも姉よりも、皮が厚く、骨が硬くありました。彼女を勝と命名したのは、其の姉の竹崎順子でありました。彼女を澁柿と綽號したのは、其の姉德富久子でありました。先生は實に勝氣の女で、勝とは名詮自證です。而して中々澁い質で、澁柿との綽號も、決して不當ではありませぬ。此の澁柿の澁味は、先生の老年のみを知りたる方々には、お解りになりますまいが、中年若しくは其の以前から知つた人には、誰れでも滿喫せぬものはありますまい。併し矢島先生を